

染屋台条里水田跡遺跡
金井裏遺跡
殿田遺跡

—一般国道18号上田バイパス改築工事に
伴う3遺跡緊急発掘調査概報—

1986年3月

上田市教育委員会

染屋台条里水田跡遺跡
金井裏遺跡
殿田遺跡

—一般国道18号上田バイパス改築工事に
伴う3遺跡緊急発掘調査概報—

1986年3月

上田市教育委員会

序

昭和60年度に一般国道18号上川バイパス改築工事が建設省によって、住吉から常磐城地籍にかけて計画されました。この事業予定地内に住吉地籍の染屋台条里水田跡遺跡、蛇沢地籍の金井裏遺跡、常磐城地籍の殿田遺跡の3遺跡が含まれており、このため事前に発掘調査が実施されました。

調査は7月中旬の炎暑のさ中から11月下旬までの寒さが加わる折まで続けられました。その結果、染屋台条里水田跡遺跡の古代の条里遺構の確認はできませんでしたが、金井裏遺跡からは弥生時代後期の箱清水式土器片や上師器片、須恵器片が出上しました。また完全な竪穴式住居跡2軒が検出されました。

さらに殿田遺跡からは平安時代の住居跡や柱穴状の遺構が見つかり、また須恵器片や上師器片等の遺物が多量に出上しました。特に奈朝十二銭の最初の貨幣で、わが国最古の貨幣である和同開珎が1点発見され、大きな成果を収めることができました。

このたびの調査にご尽力いただいた調査団の諸先生方、調査にご協力をお願ひした地元自治会や学生の皆さん、並びに建設省長野国道工事事務所の関係者の方々に衷心より厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月

上田市教育長 櫻井 廣男

例　　言

- 1 本書は昭和60年7月16日から11月19日まで実施した、上田バイパス工事に伴う染屋台条里水田跡遺跡、金井裏遺跡、殿田遺跡の緊急発掘調査概報である。
- 2 発掘調査は、建設省の依頼を受けて、上田市教育委員会が主体となり実施したもので、染屋台条里水田跡遺跡・金井裏遺跡は川上 元が担当し、殿田遺跡は林 和男が担当した。
- 3 本書の執筆は以下のとおり分担した。

第1章	倉沢正幸
第2章第1節	川上 元
〃 第2節	林 和男
第3章	川上 元
第4章	〃
第5章第1節・第3節	林 和男
〃 第2節	尾見智志
4 染屋台条里水田跡遺跡・金井裏遺跡の遺構及び上器実測等は倉沢正幸・中沢徳士・石井弘子・川上 元が担当した。	
5 殿田遺跡の遺物整理は尾見智志・坂井美嗣・上条久和・西川和恵・宮坂直子・山辺せつ子が行なった。また図版作成は尾見・坂井が行ない、土器観察表は坂井が作成した。図版番号と土器観察表の土器番号は一致する。	
6 本調査に係わる出土遺物は、上田市教育委員会が一括保管している。	

目 次

序

例 言

第1章 調査に至る経過

第1節 発掘調査の経過	1
第2節 調査団の構成	1
第3節 調査日誌	3

第2章 遺跡の環境

第1節 自然的環境	6
第2節 歴史的環境	7

第3章 染屋台条里水田跡遺跡

第1節 調査	10
第2節 層位	10
第3節 検出遺構及び遺物	15
第4節 まとめ	15

第4章 金井裏遺跡

第1節 遺跡	16
第2節 検出遺構	16
第3節 出土遺物	20
第4節 まとめ	22

第5章 殿田遺跡

第1節 遺構	23
第2節 出土した遺物	30
第3節 まとめ	49

写真図版	50
------	----

第1章 調査に至る経過

第1節 発掘調査の経過

一般国道18号上田バイパス改築工事が建設省関東地方建設局で計画され、その事業予定地内の住吉地縫に染屋台条里水田跡遺跡、蛇沢地縫に金井裏遺跡、常磐城地縫に殿田遺跡の3遺跡が存在していた。このため、工事主体者である建設省長野国造工事事務所と長野県教育委員会、上田市教育委員会の関係者が事前に保護協議を行い、工事施工前の事前の発掘調査を実施することに決定した。

7月16日 市役所会議室で打合せ会議が開かれ、同日から染屋台条里水田跡遺跡の調査に着手した。この調査の協力者として、夏期休業中の長野大学の学生が大勢参加した。染屋台の条里遺構調査は7月25日まで終了し、他の2遺跡については塩田の手塚地区の発掘調査が終了してから実施することになった。

手塚地区的発掘調査がひと区切りした9月18日から金井裏遺跡発掘調査が着手され、10月23日まで実施された。その結果、多数の箱溝式土器片や土師器片、須恵器片が出土し、さらに2軒の住居址も確認された。

一方、殿田遺跡の発掘調査は10月16日から着手され、途中信濃國府跡確認調査による中断があったものの、11月19日までで調査は終了した。この調査の結果、和同開珎1点や須恵器、土師器の瓶や壺の破片等が多数出土した。

現場での発掘調査終了後、市立博物館、信濃國分寺資料館に於いて、出土した遺物の整理、報告書の作成が行われた。昭和61年3月31日、調査報告書が刊行され、発掘調査は終了した。

第2節 調査団の構成

上田市教育委員会は、上田バイパス工事に伴う3遺跡の発掘調査に対応して、新たに殿田遺跡他発掘調査団を編成した。調査団の構成は次のとおりである。

殿田遺跡他発掘調査団

團長	五十嵐幹雄	上田市文化財調査委員
副團長兼 調査主任	川上 元	上田市立博物館学芸員
調査員	林 和男	信濃國分寺資料館学芸員
"	倉沢 正幸	社会教育課学芸員

調査員 中沢 徳士 社会教育課学芸員（出向）
〃 保坂 富男 長野県考古学会会員
調査補助員 西川 和恵 佐良大学学生
事務局長 深井 武雄 社会教育課長（昭和60年9月30日迄）
〃 桜口 稔 〃 （昭和60年10月1日より）
事務局次長 内藤 良典 文化係長
事務局員 會沢 正幸 文化係
調査協力者 坂口四郎 野口今朝吉 増田久喜 古畑金吾 小林 理 金井伸雄 能見住子
中村一彦 正橋竹次郎 山崎鶴次郎 野口ハツヲ 新田明子 島田英樹 長沢富士子
深町三郎 深町玲子 佐藤宣子 青沼翠江 深町美恵子 山崎美知子 保坂正子 半井隆憲 佐藤文彦 米山勝己 中島和恵 倉島美知子 霧島道広 中井昭夫 高田尚紀 金尾良信 高橋久美 吉沢秀代 茂木直美 熊倉謙一郎 坂下逸子 梅木 実 石井弘子 赤池正行 大倉みつ子 萩原由美子 酒井浩之
石井静子 柴原明美 三浦祐嗣 伊藤文夫 磯野 一 石田一晃 野口和幸

第3節 調査日誌

(染屋台条里水田跡遺跡)

昭和60年

- 7月16日 (火) 晴 発掘調査準備、調査器材の運搬及びテント設営。午後調査地点の測量、杭打ち。測量はみすず測量㈱に依頼。調査地点の草刈り作業。
- 7月17日 (水) 晴 トレンチ設定作業。重機によりトレンチ掘り下げ作業。Bトレンチとする。ベンチ・マークの確認。
- 7月18日 (木) 晴 Bトレンチ、Fトレンチ掘り下げ作業。トレンチ内の土上げと清掃作業。トレンチ内の実測作業準備。
- 7月19日 (金) 曇後雨 Fトレンチ、Aトレンチ、Cトレンチ掘り下げ作業。幅1.5m、深さ1.5m平均で掘り下げ。午後Dトレンチ、Eトレンチ掘り下げ作業。雨が激しく降り、テント周辺の排水を行う。
- 7月20日 (土) 晴時々雨 ポンプで雨水の排水作業。午後、セクション実測のための杭打ち作業と水糸張り。
- 7月22日 (月) 晴 トレンチ内に溜った雨水と泥の排水作業。各トレンチにセクション実測用の基準杭設定。
- 7月23日 (火) 晴後雨 Fトレンチ、Eトレンチ、Dトレンチのセクション実測作業(1:20)。残りのトレンチの排水と清掃作業。
- 7月24日 (水) 晴 Aトレンチ、Bトレンチのセクション実測作業。平板で各トレンチの地形測量(1:100)。土層断面写真撮影。
- 7月25日 (木) 晴 Bトレンチ、Cトレンチのセクション実測作業。各トレンチの写真撮影。調査器材の撤収を行い現場での調査を終了する。

(金井裏遺跡)

昭和60年

- 7月22日 (火) 晴 発掘調査準備、重機で表土除去作業を開始。
- 7月23日 (水) 晴後雨 引き続いて表土除去作業を実施。塩田西部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査のため一時調査を中断する。
- 9月17日 (火) 曇 塩田地区の発掘調査が終了したため、調査器材を現場に搬入する。杭打ち作業を開始。
- 9月18日 (水) 晴後雨 テント設営作業。杭打ちをして、グリッドを設定。グリッド掘り下げに着手。

- 9月19日 (木) 曇後晴 グリッド掘り下げ作業。数片の土器片出土。グリッドの杭打ち作業も併せて行う。
- 9月20日 (金) 雨後晴 グリッド掘り下げ作業。土器片が出土する。写真撮影。
- 9月21日 (土) 晴 各グリッド掘り下げ作業。遺構検出作業を併せて行う。
- 9月24日 (火) 雨 一日雨降りのため作業を中止。
- 9月25日 (水) 曇時々雨 各グリッド掘り下げ作業。土器片出土。
- 9月26日 (木) 晴 グリッド掘り下げ作業。W1N2グリッド北側部分に東西方向に地層確認のためのトレンチ設定。
- 9月27日 (金) 晴 W3N2グリッド北側にトレンチ設定。地層の変化を確認する。
- 9月28日 (土) 曇時々雨 W2N2グリッド、W1N2グリッド周辺を削平する。地層変化を確認。
- 9月30日 (月) 晴 W2N2グリッドを中心に遺構を追う。周辺グリッドの削平作業。
- 10月1日 (火) 晴 グリッド掘り下げ作業。遺構検出作業。
- 10月2日 (水) 晴 W2N2グリッド周辺の削平作業。遺構検出作業。遺構であることが確認でき写真撮影。
- 10月3日 (木) 晴 各グリッド掘り下げ作業。
- 10月4日 (金) 曇 N3E2、N4E2グリッドの周辺を削平して遺構確認を行う。このプランをSB-02とし、W2N2グリッド周辺の遺構をSB-01とする。写真撮影。
- 10月5日 (土) 曇時々雨 SB-01、SB-02の遺構掘り下げ作業。台風の影響で雨が降り出し、早めに作業を終了する。
- 10月7日 (月) 晴 SB-01の遺構検出作業。SB-02の床面検出作業を実施。
- 10月8日 (火) 晴 SB-01内遺構検出作業。SB-02遺構掘り作業。高壙、弥生式土器等が出土。
- 10月9日 (水) 晴 SB-01の壁を検出。出土土器は横清水式土器。SB-02遺構掘り作業。
- 10月10日 (木) 晴 SB-01内遺構検出作業。SB-02南側の床面検出作業。写真撮影。
- 10月12日 (土) 曇後晴 SB-01セクション実測作業。柱穴状遺構検出。SB-02セクション実測作業。グリッド拡張作業。
- 10月14日 (月) 晴 SB-01遺構実測作業。SB-02遺構掘り作業。
- 10月15日 (火) 晴 SB-01、SB-02遺構実測作業。レベル計測。
- 10月16日 (水) 曙 SB-01、SB-02内出土遺物の実測。写真撮影。
- 10月18日 (金) 曙 SB-01、SB-02遺構掘り作業。写真撮影。
- 10月19日 (土) 曙時々晴 SB-01の床面を全体に掘り下げる。柱穴状ビットが検出され半蔵する。SB-02の床面も掘り下げる。
- 10月20日 (日) 曙 SB-01、SB-02遺構実測作業(1:20)。
- 10月21日 (月) 晴 SB-01、SB-02床面掘り下げ作業。清掃作業。写真撮影。

10月22日 (火) 晴時々曇 SB-01、SB-02の検出ピット掘り下げ作業。平板実測作業。写真撮影。

10月23日 (水) 晴 SB-01、SB-02の平板実測作業終了。全体の写真撮影。本日で現場調査を終了した。

(殿田遺跡)

昭和60年

10月16日 (木) 曇 殿田遺跡の表土剥ぎ作業を実施。畠地を重機で地表下40cmまで掘り下げる。4箇所で黒色土層が顕われる。テント設営、杭打ち作業を同時に実施。

10月21日 (火) 曇 草ヶザリでグリッド掘り下げ作業。杭打ち作業。土師器片、須恵器片が出土。

10月22日 (水) 晴 時々晴 グリッド番号設定。調査地点の遺構検出作業を行う。

10月23日 (木) 晴 引き続いて遺構検出作業を実施。隨所に黒色土層が出土する。

10月24日 (金) 晴 遺構検出作業を引き続いて行う。2箇所で上層確認のためのトレンチを設定。土師器片、須恵器片が多数出土。

10月25日 (土) 晴 遺構検出作業。更に2箇所トレンチを設定して上層の確認を行う。調査地点北側の一帯は地山面であることが明らかになる。

10月26日 (日) 晴 調査地点南側部分の遺構検出作業。人頭大より大きめの石が多数堆積しており、遺構の確認は難しい。夕方B-3グリッドに於て和同開塚が1点出土。

10月28日 (火) 晴 遺構検出作業。調査地点南側部分からは須恵器蓋や高台付环の底部、甕の破片等が多数出土。

10月29日 (水) 曇 後雨 遺構面に散水して、プランの確認作業を行う。午後は雨が激しくなり途中で作業を中止する。

10月31日 (木) 曇 住居址の遺構面に直交するサブトレンチを設定する。住居址プランの検討をする。

11月2日 (金) 晴 住居址5軒のプランを確認する。遺構面を丁寧に移植ゴテで削り取る。

11月4日 (日) 晴 SB-01、SK-01を中心に遺構掘り作業。調査地点南側の多数の石が堆積した部分の掘り下げ作業。神科地区の信濃国府跡推定地の確認調査が開始されたため、一時殿田遺跡の発掘調査を中断する。

11月16日 (火) 晴 SB-01、SK-01の遺構掘り作業。併せて遺構実測作業を行う。(1:20)

11月18日 (木) 晴時々晴 遺構実測作業とレベル測定作業。調査地点南側部分の掘り下げ作業を実施。

11月19日 (金) 晴 南側部分の掘り下げ作業。須恵器大甕の破片出土。写真撮影。午後調査器材の撤収を行い、現場での調査を終了した。

昭和60年12月から61年2月まで、出土遺物の整理と発掘調査報告書の作成を行った。

第2章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

今回発掘調査を実施した3遺跡の立地点は、それぞれ異った様相を呈しているといえる。

染屋台条里水田跡遺跡は上田市街地の東側に一段と高くなつた、いわゆる染屋台地上に位置している。この台地の494.4haにわたって、条里的遺構が確認されているが、そのうち今次の調査は西に偏した、大字古里字源訪田にある。この台地は北に虚空巖山（672m）と横山丘陵が存し、その麓で東西の長さ約3.5kmをはかる。また、東側は神川に臨む25~30mを有す段丘崖が東北方からやや西南方向に約3.8kmに及んでおり、さらに西側は上田市街地により15~20mの比高をもつ、いわゆる染屋台段丘崖が西方から東南方向に約3kmに及んでいる。染屋台地（または神科台ともよばれる）はこの3側線に囲まれた三角状台地で、面積はおよそ5.76kmという。この台地は北辺部が580m、南辺部が500mの標高をもち、東北から西南方向に傾斜を呈しており、地質学的には隆起扇状地と呼ばれている。

また、この台地の土質は、下部が段丘疊層で、その上層部は2~3mもの厚さをもつ酸性土の強い強粘土（ローム層）でおおわれている。この強粘土は地質学的に染屋層と呼ばれているもので、第四紀洪積世に生成されたものといわれている。

金井裏遺跡は、染屋台条里水田跡遺跡の調査地点から北に直線距離で約800m地点の上田市大字上田字金井裏にある。本遺跡は金井集落の北側背後の第1段丘崖に立地し、その南は矢出沢川によって切られた沢地形となり、大変見晴らしのよい場所である。この地点は大きくは太郎山麓の黄金沢扇状地末端にあたる場所であり、山口集落の谷口より蛇沢・金井集落まで1.6km、比高120mというかなり急傾斜の扇状地で、押出し地形ともみられている。

ところで、北の太郎山麓の南面は、いくつかの小扇状地が形成されており、なかでも大きいのが前述の黄金沢扇状地であるが、それ以西は小規模なものとなっている。各期の遺跡はこうした扇状地の扇頂部と扇端部にみられ、とくに後者に集中して発見される。

上田市大字常磐城字殿田にある殿田遺跡も太郎山麓南面の小扇状地の一つに位置している。ここは太郎山の西方山麓線にあたり、太郎山が直接平坦部に接して小溪谷の出口に崖錐が形成された地点である。遺跡の前面の平坦部には条里的区画をもつた水田地帯となっていたが、近年この一帯も宅地化が進み、住宅密集地へと変貌してきている。

なお、調査した3遺跡の標高は、染屋台条里水田跡遺跡が518m、金井裏遺跡が499m、および殿田遺跡が459mをはかる。

第2節 歴史的環境

太郎山、虚空蔵山の南山麓地帯には縄文時代から近世に至る遺跡が数多く分布しており、上田盆地の歴史を考えるうえで重要な地域である。

縄文時代の遺跡は黄金沢・扇状地の西扇端部に分布している。この地帯には複数の遺跡があり、これらをひとつにとらえて八幡遺跡と称する場合もある。このうち、国立東信病院敷地にあたる思川遺跡からは、縄文時代後期の敷石住居址の一部と多量の縄文中・後期の土器、それにイノシシやニホンシカなどの獣骨角が出土している(注1)。また、秋和地区の宮原遺跡から縄文前期の土器片が、風呂川遺跡から縄文中・後期の土器片が出土していると伝えられているが(注2)、その数は少なく詳細は不明である。なお、宮原遺跡はその大部分が工場用地造成のために破壊されてしまっている。

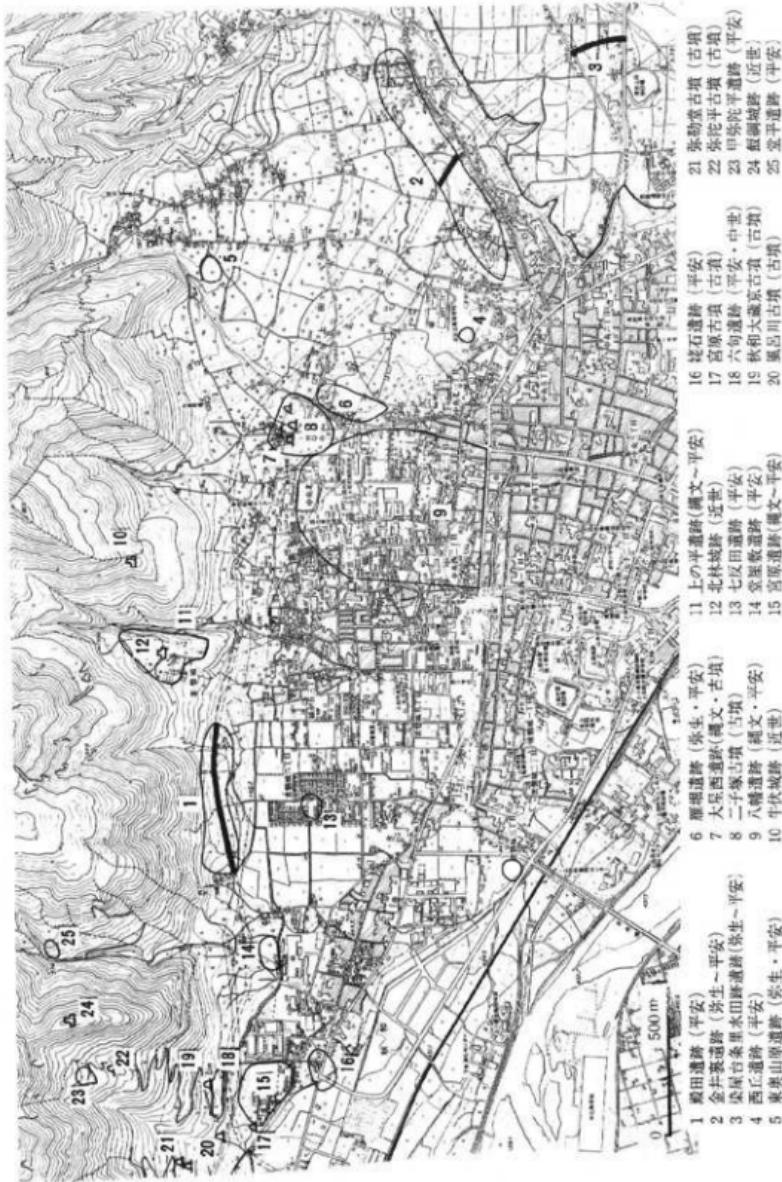
弥生時代の遺跡は八幡遺跡のほか、太郎山山腹のテラス状台地上の上の平遺跡、矢出沢川右岸台地上の金井裏遺跡、それに宮原遺跡からも若干の弥生土器が出土している。上の平遺跡は畜舍建設に先立ち発掘調査が行なわれており、弥生時代後期の土墳墓1期が発見されている(注3)。また、金井裏遺跡からは工事中に住居址と思われる所から弥生時代後期の帯形土器が発見されている。

太郎山、虚空蔵山南山麓には11基の古墳が知られている。そのうちで、最も古いものは五世紀後半に位置づけられる秋和八幡大歳京古墳である。この古墳は上田盆地でも大型の部類に入る方墳である。八幡遺跡の北東にある二子塚古墳は6世紀代のもので、東北信地方唯一の前方後円墳である。円墳は秋和地区に立っているが、これらはいずれも6世紀末から7世紀にかけてのものである。また、二子塚古墳脇の4基の円墳は、二子塚古墳の陪塚と伝えられているがその確証はない。古墳時代の集落跡は山麓一帯に散在している。五世紀代前半の遺跡には八幡遺跡の東側に存在する雁塚遺跡がある(注4)。さらに五世紀代後半の遺跡に思川遺跡(注5)、秋和の柿の木遺跡がある。六・七世紀の遺物は二子塚古墳の周囲に広がる大量西遺跡、八幡遺跡、風呂川遺跡等に散在するが明らかではない。

奈良時代から中世にかけての遺物は山麓地帯の遺跡からは多量に発見されている。ただ、今まで調査が行なわれていないため詳細は不明である。上の平遺跡の調査では奈良時代の須恵窯1基が発見されており、小県地方の主須恵器生産地である丸子町生田の依田古窯址との関係、あるいは虚空蔵山の裏側にあたる坂城古窯との関係が注目されるところである。

中世には太郎山、虚空蔵山の山頂あるいは中腹に数多くの山城が築かれている。東から牛伏城跡、アラ城跡、北林城跡、飯綱城跡、虚空蔵山城跡、燕城跡、高ツヤ城跡、和合城跡とつづいている。また、中腹のところどころに石を切り出した跡も残されている。

天文11年(1583年)の真田昌幸による上田城築城、それにつづく城下町の整備により、太郎山



第1図 上田盆地北側山麓の地形と遺跡分布図

山麓や千曲川沿いに古くからあった村落はすべて上田城周辺と北国街道沿いに移住された。これにより、それまでの上田盆地千曲川右岸地帯の村落構成は一変した。

今回発掘調査が行なわれた太郎山、虚空蔵山山麓は縄文時代から中世まで連続と人々の生活の跡が残されている地帯である。

今回発掘調査が行なわれた染屋台条里水田跡遺跡は、上田盆地では最も規模の大きな条里的遺構として知られており、この地に創置期の信濃國府が置かれていたとも考えられ、現在発掘調査がつづけられている（注6）。金井裏遺跡は段丘面に沿って細長く広がっている遺跡で、弥生時代から平安時代にかけての遺物が散在している。殿田遺跡は南斜面の畠地に土師器・須恵器が散布しているほか、東側に生塚神社があることから中世の村落があった場所ではないかとも考えられている。

引用参考文献

- 1 五十嵐幹雄「獣角・骨を出した長野県上田市北上田遺跡」『信濃』Ⅸ-11 1957年
- 2 上田市教育委員会編「上田市の原始・古代文化」 1974年
- 3 川上 元「上田市平遠跡緊急調査報告」『長野県考古学会誌』8 1970年
- 4 塩入秀彦「上田市雁坂出土の有段口縁壺形土器」『長野県考古学会誌』31 1978年
- 5 林 和男「国立東信病院敷地内（想川遺跡）出土の土師器」『上小考古』14 1983年
- 6 上田市教育委員会編「条里遺構分布調査概報—染屋地区—」 1976年
上田市教育委員会編「東之手・西之手遺跡」 1983年
上田市教育委員会編「創置の信濃國府跡推定地確認調査概報II」 1984年
上田市教育委員会編「染屋台条里水田跡遺跡調査概報・創置の信濃國府跡推定地確認調査概報III」 1985年
上田市教育委員会編「創置の信濃國府跡推定地確認調査概報IV」 1986年

第3章 染屋台条里水田跡遺跡

第1節 調査

染屋台一帯の約494.4haにわたって整然と区画されたいわゆる条里水田跡がみられるという。この土地に刻まれた遺構の追求は、かなり早くからなされていたのであるが、本格的調査を行われたのは、昭和47年からといえる。つまり、国・県の補助を得て上田市教育委員会が、昭和47年度から4年間にわたって実施したもので、かなりの成果を得た。これは微地形の変遷や用水路の歴史的光明、用水堰の沿革、伝承、慣習及び小字地名などの調査を通して古地の条里遺構光明をしたもので、発掘調査を伴わない新しい試みであった。この結果、染屋台地に印された水田の区画は、大化改新に伴ったいわゆる条里製造構ではなく、もっと後に構築されたものであろうとの見解を示し、条里的遺構の名称で呼ぶこととなった。

今回調査を行った地点は、前述したようにこの台地の条里的遺構が残る西側に偏したところである。上田バイパスの予定路線は、この地点を南北に走り、幅員25mである。したがって、発掘調査はこの範囲の中にトレーンチを設定して行った。調査はとくに地層の確認を主眼とし、A~Fの6トレーンチを設定して実施したものである(第2図)。

第2節 層位(第3・4図)

各トレーンチを東西・南北方向となるよう設定し、幅1.5m、深さ約1.0~1.2mまで掘りさげ、各地点の層位的な確認をした。なお、各トレーンチは30mを1ブロックとして、南北方向のトレーンチは南側より第1・2区とし、東西方向のトレーンチは西側より第1・2区と呼ぶこととした。また、土層断面の観察は原則として南北方向のトレーンチでは西壁、東西方向トレーンチでは北壁で作成した。

検出された各トレーンチの土層断面は、以下にのべるとおりであるが、小範囲での調査であったためか、若干の異なりはあったものの、全体としてはほぼ同様な状態を示していたといえる。

Aトレーンチ

調査区の東南部分の南北方向に約11mのトレーンチを設定したものである。第1区・2区とも、大きく3層に区分される土層が観察されたが、詳細にみると第2区では第1層と第II層の間に帶状に堆積したところどころに黒粒を含む暗褐色上層がみられた。この層はいわゆる鉄分を含んだ溶脱層とちがっており、後の何らかの土層擾乱によるものであろうか。したがって、本トレーンチ

第2図 事業計画地域および発掘地点



チにおいては原初の条單的水田跡とみられる遺構の確認はできなかった。また関係する遺物も検出できなかった。

B トレンチ

△トレンチの西側 6 m のところに平行して南北に設定したトレンチが本トレンチである。約 25 m の長さのトレンチのうち約 17 m ほどの土層観察ができた。このうち、図示したものは第 3 区西側の土層断面である。6 層に及ぶかなりこまかかな土層であり、とくに第 II・III・IV 層が帯状に堆積していることが注意される。この B トレンチ第 3 区の部分は、水田の後に宅地となっていたところであり、あるいは宅地造成によって土層上面を削平してしまった可能性が強い。本トレンチにおいても、条單的遺構に関連するものは検出できなかったといえる。

C トレンチ

前述の B トレンチの西側約 6 m の部分に同様に南北方向に設定したトレンチである。約 28 m の長さの土層観察ができた。第 3 区での土層断面は、第 III 層の灰茶褐色粘質土層の厚さが目につくことと、第 I 層の耕作上層と第 II 層暗灰褐色土層の間に、部分的に鉄分の含んだ薄い溶脱層が観察できたのであるが、農道をはさんだ北側の第 4 区に続いていない。どのようなことであるのか不明である。

また、第 4 区では第 III 層の灰茶褐色粘質土層上部と第 IV 層となる暗茶褐色砂質土層上面との堆積面が、かなり乱れていることが観察できる。また、部分的に灰褐色粘質土層や暗灰褐色砂質層がブロック状に混入するところもみられる。

D トレンチ

調査区の西北部分に C トレンチに平行して南北方向に設定したトレンチである。約 10 m の長さをもつ第 5 区の土層断面は、第 I 層耕作土層、第 II 層黒粒と小礫を含む暗灰褐色土層、第 III 層灰褐色粘質土層、第 IV 層茶褐色砂質土層の層序を示しており、他のトレンチとほぼ同様の様相を呈している。ただし、南側では第 II 層がみられず、途中から観察される。

E トレンチ

調査区の南側に東西に設定したトレンチである。約 13 m にわたって土層の観察をしたものであるが、近接する A・B トレンチの土層とほぼ同様なものであるため、あえて図示しなかった。なお、本トレンチからも関連する遺構および遺物の検出はなされなかった。

F トレンチ

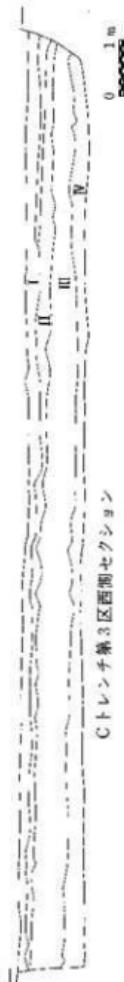
調査区の北側部分に東西に設定したトレンチで、約 14 m にわたって土層観察を行った。表土か



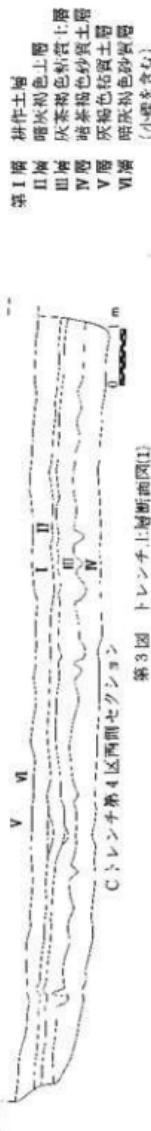
Aトレンチ第1反西側セクション



八 十 ビ ル ナ 番 地 古 舞 モ シ ジ ジ

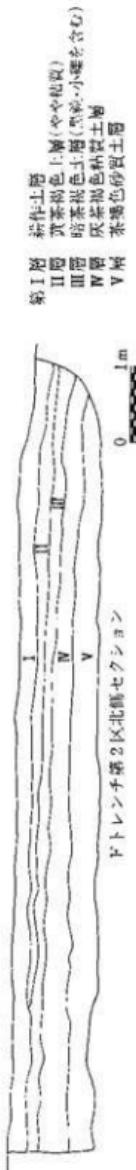


ビトレンチ第3区西側セクション



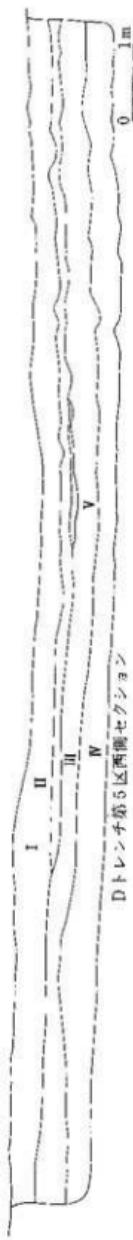
第3回 トベノ子、上野断前闇(1)

第4図 トレンチ4-1断面図(図2)



第1層 農作土層
II層 暗茶褐色土層
III層 灰茶褐色粘質土層
IV層 暗茶褐色砂質土層
V層 茶褐色砂質土層

Dトレンチ第5区西側セクション



ら約1mの深さまでの層序は、他のトレンチのものと基本的には異なるものではなかったが、部分的に異なるものが混入したり、上層の厚さなどに若干のちがいがみられるものである。いずれにしても、本トレンチも現水田面のみで、それ以前における水田面の痕跡は確認できなかつたといえる。

第3節 検出遺構及び遺物

今次の調査は前節で述べたとおり、トレンチ発掘法による土層観察を中心としたものであったため、トレンチ内は主として機械の力によって、細部を人の手による調査方法をとった。とくに、原初の条里水田遺構の確認に半眼がおかれたため、土層断面にあらわれる水田遺構検出に注意がむけられた。

しかし、今回の短期間の調査と狭い範囲の調査では、関連する遺構及び遺物の検出はできなかつたのである。

第4節 まとめ

前述したように、染屋台における条里的遺構の究明は早くから行われており、かなりの成果があがつてきている。昭和57年度から毎年実施されている割置の信濃国府跡推定地の確認調査は、この台地上の字東ノ手・西ノ手を中心とした地域で行われているため、あわせて条單的遺構との関係も追求されているのである。とくに昭和59年度は、神科小学校南側の字大和町・字番町等で条單水田跡遺跡の調査も平行して行った。

しかし、これらの調査にもかかわらず、発掘調査によって確実な原初の水田遺構の検出がなされていないのである。このことは屋代条單にみられるように古い条里遺構が構築され、さらに新しいものがつくられ、層位を異にしているものではなく、染屋台の条里的遺構はいずれも現水田面に包含されているものであろうかとも考えられる。

いずれにしても、染屋台地における条里地割りは、大化改新に伴ういわゆる条里製造構ではなく、後の時代に構築されたとの見方が一般的である。今回の調査にあたっても、これらの点をいくらかでもつかめればとの願いをこめて実施した。しかしながら、各トレンチの様相からみると、今回も残念ながら把握するに至らなかつたといえる。今後さらに追求していきたい。

第4章 金井裏遺跡

第1節 遺 跡

本遺跡は蛇沢集落の北に接してある段丘面上にのる遺跡であり、その範囲は段丘崖上に沿って、東西に細長く広がっていることが知られている。一帯はリンゴ・ブドウなどの栽培が盛んであり、耕作の際などに弥生後期の箱清水式土器や土師器、須恵器などの資料が採集されていた。本調査を実施する直前にも、リンゴ畑に通ずる農道拡幅工事中に土層断面から、箱清水期の土器片と住居址のプランの断面が発見された。

今次の調査地点は、こうした遺物採集箇所を中心とし、しかも地形的条件をも考慮して設定したものである。しかし、調査に先立った重機による表土はぎ作業の所見では、遺跡の可能性はあまり期待できない感じを受けたのである。ところが、調査が進行するにしたがって、2つの住居址とそれに伴う遺物群が、調査設定地点のほぼ中央部から検出されるに至った。扇状地末端部であるため、上層部はかなりの土砂の堆積があり、遺構・遺物はその下部にすっかり埋ってしまったとみられる。

なお、調査にあたっては、バイパス工事杭No.332を基点として、東西南北方向に3×3mのグリッドを最小単位として設定したものである。最終的には約300m²を調査できたといえる。

第2節 検出遺構

調査によって確認された遺構は、住居址2、柱穴状遺構、溝状遺構などである。このうち2軒の住居址はそれぞれ時代の異なるもので、伴出する遺物も比較的良好であった。

以下、それについて簡単にふれておきたい。

(1) 第1号住居址 SB-01(第5図)

調査区域のはば中央部、W2N2グリッド、およびW2N3グリッドを中心とする位置より検出された。本住居址は当初平面プランの確認による検出ではなく、たまたまこの中央部を東西にあけたトレンチによって住居址壁面の立上りが両サイドとも確認されたので、これを中心に精査したものである。

住居址床面は必ずしも明確でなかったが、上器の出土状況などによっては把握することができた。また、内部の柱穴とみられるビットもどうにか4箇所に確認された。住居址内のほぼ中央部に、焼土とみられた部分が検出されたが、床面までに至る精査の結果、床面に焼土が堆積した

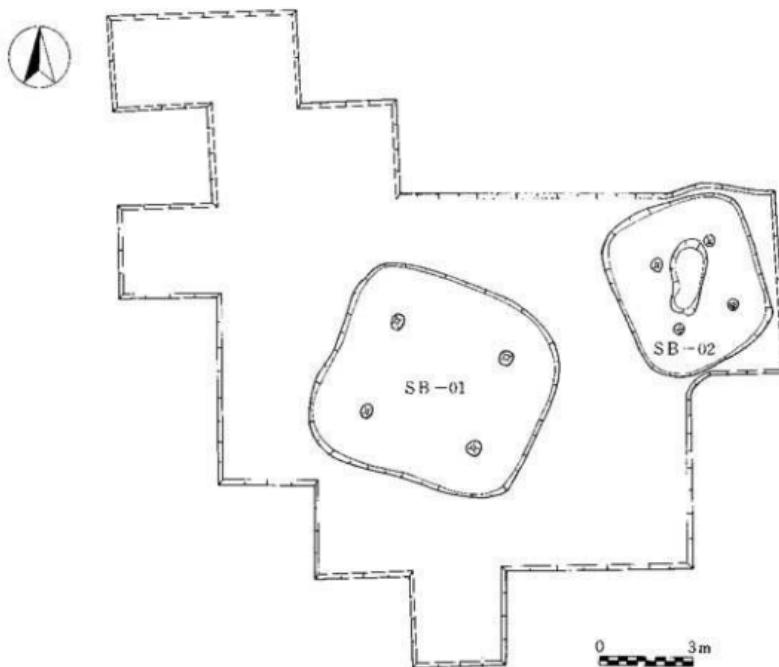
ものでないことが明確となった。

ところで、本住居址はほぼ隅丸正形のプランをとり、東西約7m、南北約6.5mをはかる規模を有している。検出された土器は住居址内部の南側に集中していることが明らかとなつたのである。

(2) 第2号住居址 SB-02(第5図)

調査区の北東隅のN 3 E 2 グリッドなどを中心とした位置から検出された。小規模であるが隅丸長方形を呈したプランである。東西4.5m×南北5.2mをはかるもので、その中央部でも、楕円形のピットを確認した。しかし、ピットは本住居址に伴う同一時期のものか、あるいは、その後に構築されたものであるのか、今回の調査では不明であった。

しかし、この内部より上器資料の検出が少ないとことなどからみて、あるいはこのピットのみ後に構築された可能性が強いようである。なお、検出された遺物は包含層からと床面からのものであったが、その区別が明確でなく、いずれもほぼ同一面からの出土とみてよいかもしれない。



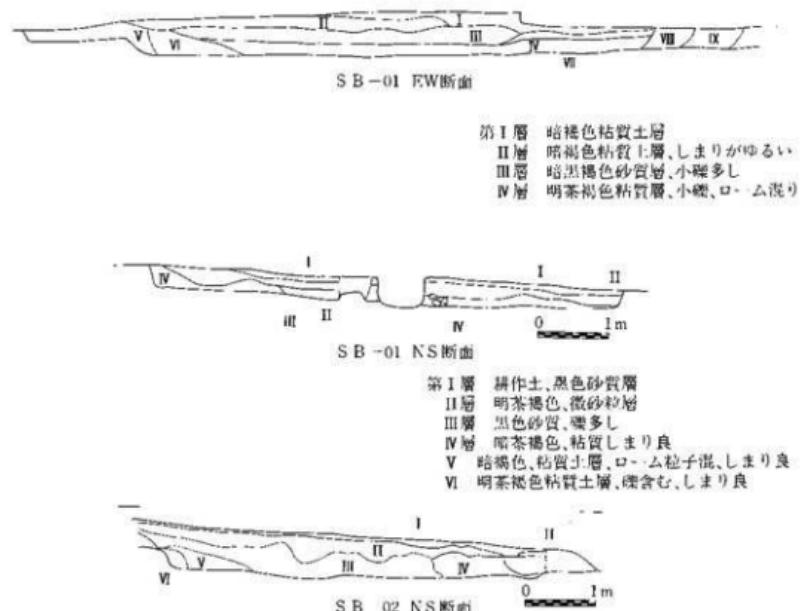
第5図 第1号・2号住居址平面図

本住居址も第1号住居址同様、床面の検出および柱穴の確認に若干手間どった感がある。ところで、第1号・2号住居址の土層を観察しておきたい(第6図)。いずれも、調査前に第I層の耕作土を重機によって削平してしまったため、図示したものの第I層はかつての第II層目に相当するものである。染屋台水田面にみられる強粘土層はみられず、若干の粘質を帯びた層位があるものの、各層は扇状地特有の疊まじりの層が多いといえる。

前述したように、第1号住居址の東西方向の上層断面に住居址の立ち上りが観察できた。

(3) 柱穴状造構(第7図)

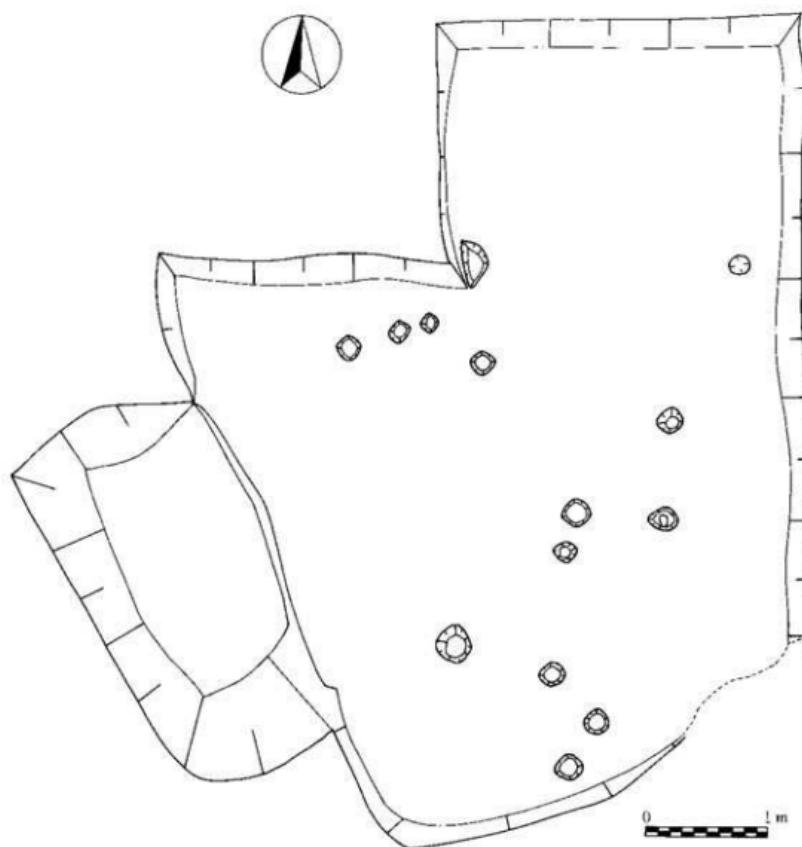
調査区の北西部にあたるW 6 N 8 グリッドを中心に検出されたピット群である。大小あわせて14ピットが確認されたが、直径10~20cmほどのもので、深さも10~20cmほどのものが多く、統一的なまとまりがないようにみえた。したがって、どうみても掘立柱を有する建物造構に想定するには無理があろうかと思う。また、周辺から採集される遺物も少なく、時代を判定する資料に乏しいといえる。



第6図 第1号・2号住居址セクション図

(4) 溝状遺構（第5回）

調査区のほぼ全域にわたって、北西から南東方向に平行して走る数条の溝状の遺構である。すでに住居址検出前から確認されており、層位的にも第Ⅱ層から第Ⅲ層位にかけてみられる。これは明らかに住居址焼絶以後に構築されたものであるが、近世以降の畠の暗渠的な性格をもった施設ではないかとの推定もしてみた。たしかに溝内部には小砾が混入しており、その可能性は十分ある。しかし、本遺跡の立地するこうした段丘崖の、むしろ水はけがよい場所に、このような暗渠状の溝を果して構築するであろうかとの疑問も出てきて、断定はできないでいる。



第7図 柱穴状遺構平面図

第3節 出土遺物（第8図）

前節で述べたように、調査ではいくつかの遺構が検出されている。しかし、遺物との関連で把えられる遺構は、第1・2号住居址だけであるので、以下それぞれの住居址出土遺物を中心に簡単にふれておきたい。

なお、第1号住居址からは弥生後期の箱清水期の遺物が集中し、第2号住居址からは土師器の比較的古い資料が検出されている。したがって、両住居址の構築年代もこの辺において大過ないものと思われる。

(1) 第1号住居址出土の遺物

本住居址から検出された資料の大半は弥生式土器であるが、唯一点の磨製石斧もある。また、腹上中から若干の土師器も出土している。

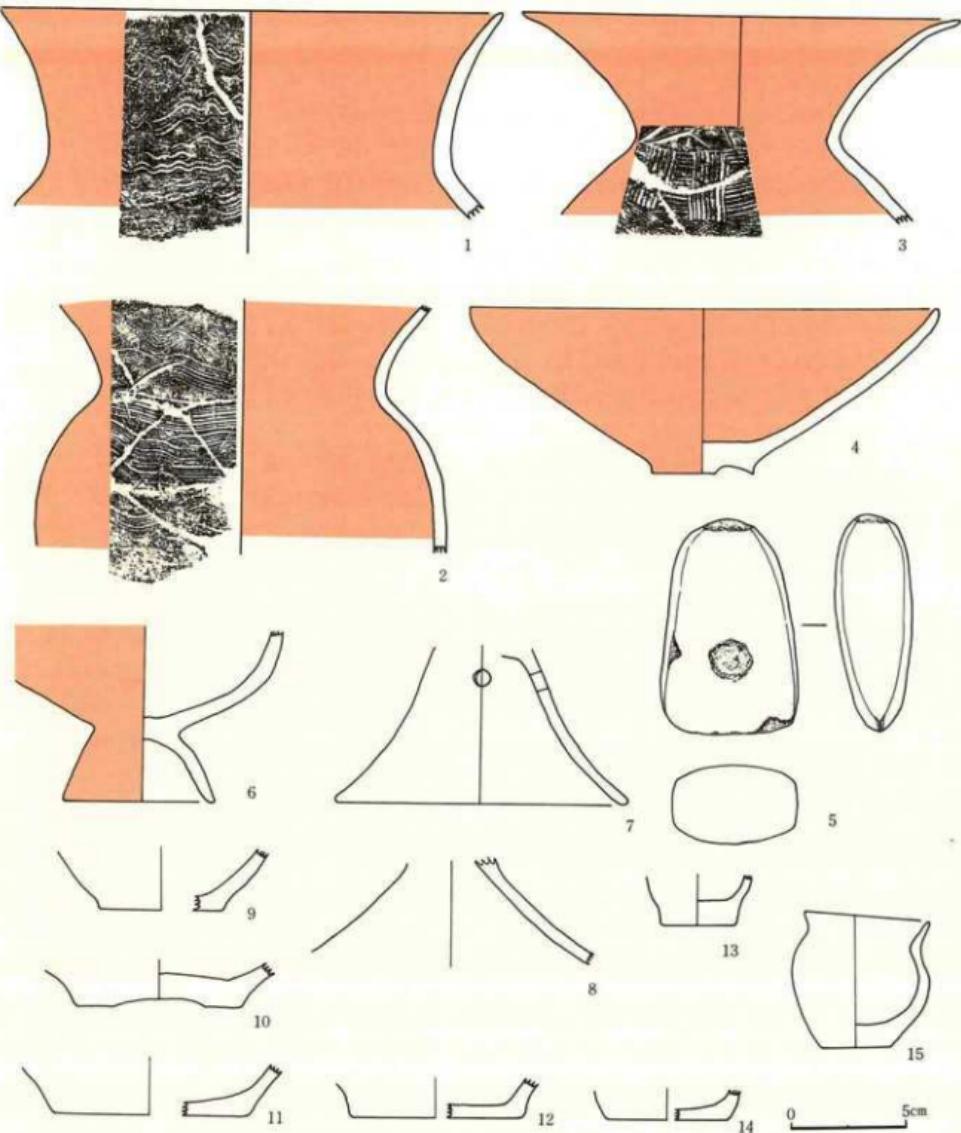
弥生式土器には甕、壺、高杯などの器形がみられる。甕は口縁部から胴部にかけて描模波状文を施文したものが多い。また、いずれも内外面にかけて赤色塗彩された資料が多いといえる。図示した1・2は甕の口縁部および胴部に続く部分の資料である。とくに2は比較的胴部が多く残っている。いずれも住居址南側の床面から一括して出土した土器である。いずれも内外面赤色塗彩を施す。外面は乱れた描模波状文が施文されている。3は口径19.3cmをはかる甕の口縁部から胴部に続く資料である。大きく外反した口縁部と頸部のくびれは、この時期の甕の特徴を示す。内外面とも赤色塗彩され、頸部に簾状文が施文される。また、4は高杯の外部である。住居址の北側壁より検出された。本資料も内外面とも赤色塗彩される。なお、図示しなかったが、口縁部に突起を有する有段の高杯片も確認されている。この資料も内外面赤色塗彩されたものである。

5は唯一点のみ検出された磨製石斧で、住居址の西南部分の壁ぎわから発見されたものである。刃部および基部と側縁に使用痕とみられる打痕が観察される。閃緑岩質で重量360gをはかる。

(2) 第2号住居址出土の遺物

本住居址内からは弥生式土器および土師器などが検出されている。前者には甕、壺、高杯などがあげられ、また後者には台付甕、甕、高杯、器台、手づくね土器などの各器種がある。本住居址の存続時期は後者の土器の時期と考えておきたい。

6は台付甕の台部とみられる。外面が赤色塗彩されている。7・8は高杯の台部である。かなり開いた形状を呈すもので、7には3孔が穿たれている。9・10は甕の底部である。この他図示しなかったが、S字状口縁台付甕の口縁部分の破片も共存していることが特に注意された。



第8図 第1号住居址(1～5)、第2号住居址(6～10)、その他(11～15)出土遺物

(3) その他の出土遺物

住居址以外の地域からも、かなりの資料が検出されている。弥生式土器、土師器、土師質土器（内耳土器など）、青磁、近世陶器あるいは若干の鉄製品などである。しかし、これらはいずれも単独で出土し、遺構との関連がつかない資料といえる。図示した11～15は住居址以外から検出されたものである。11・12・14は土師器裏の底部であり、また13・15も小形甕といわれる資料であろう。とくに15はN 3 E 2 グリッドから出土したもので、ほぼ完形で発見されている。

第4節 まとめ

今回の調査では弥生後期の住居址1軒と、その直後に属すとみられる上師期の住居址1軒が確認して、しかもほぼ完全に近い姿で検出された。また、それぞれに属す豊富な遺物も確認でき、大きな成果であった。

神科台地の原始・古代にかかる遺跡分布をみると、平坦部の条里水田跡、あるいは信濃國府推定地などに関連するものがまずあげられる。しかし、北側の山間部にも概して古い遺跡の分布が知られている。これらの遺跡は耕作中に偶然に発見したものが多いため、遺跡の規模や性格についても明らかでない。

昭和57年度から開始された神科台（染屋台）における一連の調査の信濃國府跡推定地確認調査は、この台地の考古学研究をさらに促した。これらの調査によって、いくつかの新しい発見がみられたのである。ところが、同じ神科地域においても北側の山間部の遺跡が発明されていなかった。

今回の金井裏遺跡の調査と遺構・遺物の確認は、この台地における古代の発明にさらに新しい資料を提供したことになり意義があろう。

第5章 殿田遺跡

第1節 遺構

殿田遺跡の発掘調査に先立ち、付近をも含めた分布調査を行った。これによると、遺物は小沢に挟まれた幅100mほどの小丘に分布していることがわかった。このため、発掘調査はこの小丘の最も高まった所でしかも遺物散布の密度の濃い箇所を中心に行い、順次調査区域を広げてゆくこととした。しかし、遺構が検出されたのは小丘の高まった場所に限られ、周辺部からは全く遺物、遺構が発見されず、この遺跡はかなり狭い範囲のものであることがわかったので、遺構の発見された中央部に調査の重点を置いた。

土層

本遺跡の土層は表土（耕作土）、黒色土、地山土の三層を基本とするが、畑地造成のため人为的に大きく変えられている。畑地造成以前の地形はかなり南側への急斜面となっており、そこに小谷が入り込んだ地形だったようで、造成にあたっては高いほうの土砂を低いほうへ移動して平坦な畑地を造っている。調査地点においても、山側にあたる北側の土砂を南側の低い場所へ移動して畑を造っており、北側の地層は表土と地山土の二層、南側は表土、黒色土、礫層、旧表土、黒色土、地山土となっている。ちなみに、南側の表土、黒色土、礫層は畑造成にあたって人为的に造りだされたものである。

遺構（第9図）

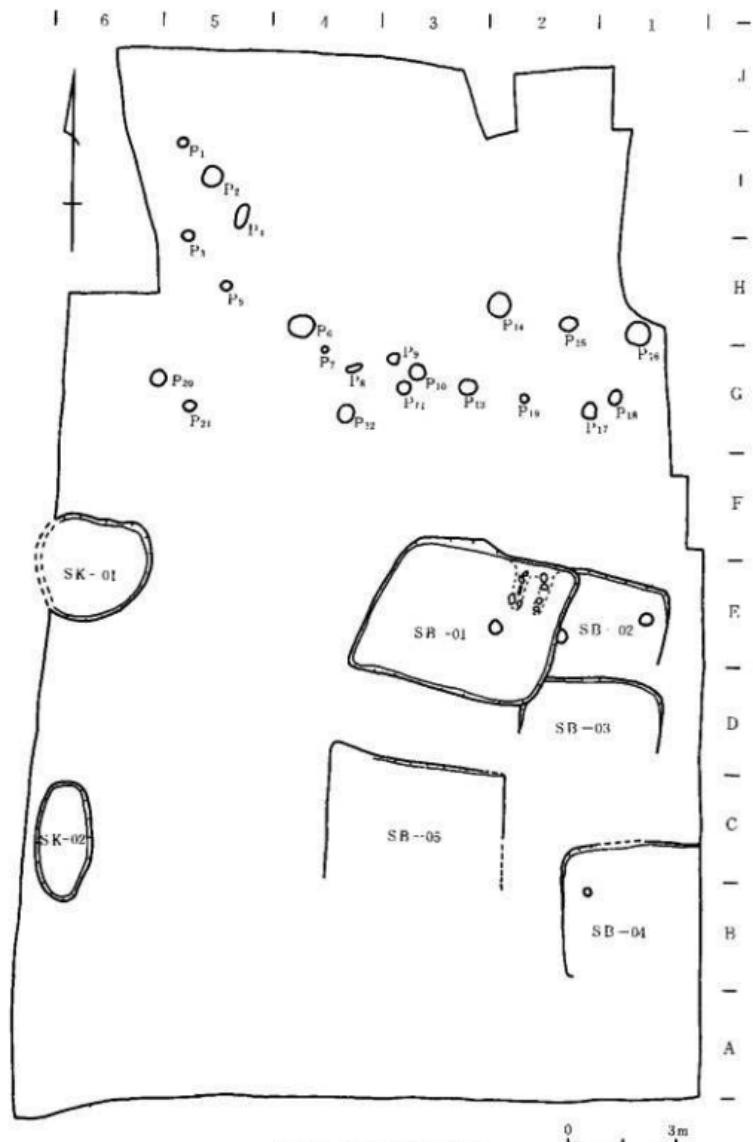
前記したように、畑地造成にあたって地形が大きく変えられていたため、調査区の北側3分の1は地山土まで削られており、柱穴様のピットが検出されたにすぎない。南側からは竪穴住居址（S B）5軒と土壙（S K）2基が発見されている。

住居址

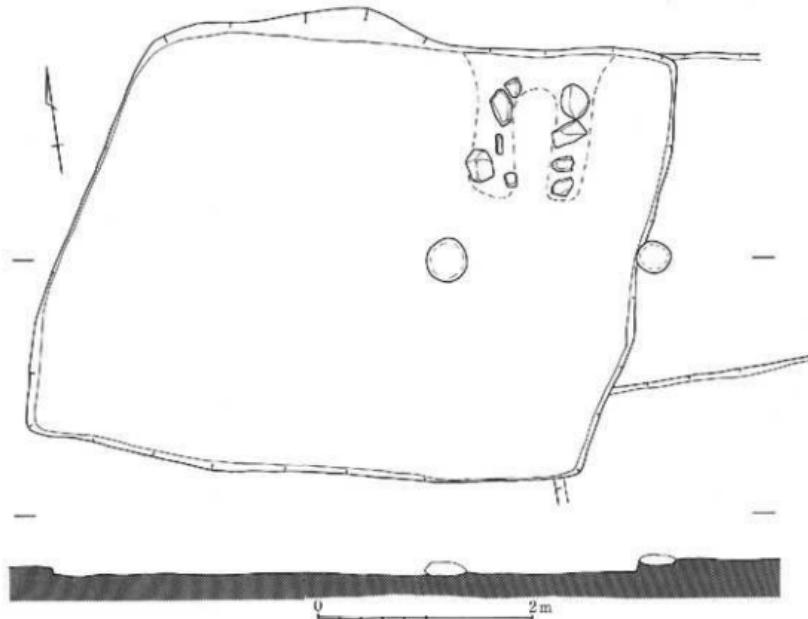
第1号住居址（第10図）

調査区のはば中央付近で検出された。第2号住居址、第3号住居址を切って築かれている。竪穴住居址の上部は既に削平されていて、床面と浅い壁、それに付属施設をかろうじて検出することができた。

住居址の規模は東西5.2m、南北4.1mで、東西に長い長方形を呈するが、西南隅はいくぶん外側に張り出している。主軸方向（カマドを中心と考えて）はN-12°-Eを示す。本住居址は黒色土



第9図 殿山遺跡遺構分布図



第10図 第1号住居址実測図

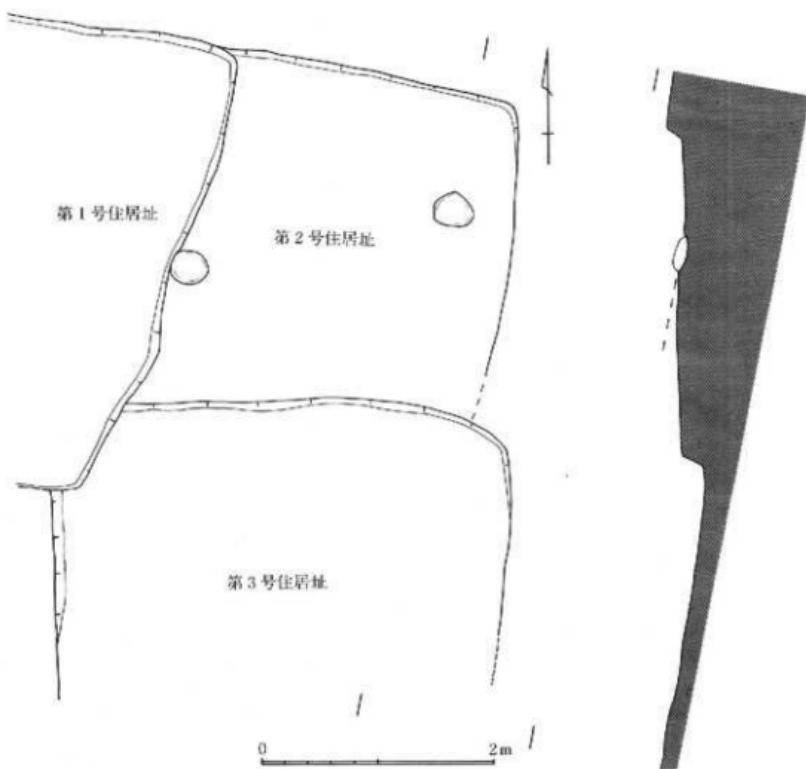
層中の調査にて確認されてはいたが、この層の搅乱が激しく、全体のプランを把握できたのは地山層においてであった。このため、壁高は僅か6cmほどを確認できたにすぎない。住居址内の施設は、北壁の東寄りにカマドが築かれていた他は、中央付近に径40cmの丸い扁平な石が床面上に置かれていただけであった。柱穴等は全く検出することができなかった。

カマドは上部を削り取られており、床面上でわずかにその痕跡を確認できたにすぎない。カマドの長さは1.4m、幅1.1mを測る大型のカマドで、礎を芯にしてそれを粘土でくるみ築かれている。内部には焼土が若干含まれていたが、その量は少ない。

遺物は、床面上とくにカマド付近を中心にして出土している。土師器、須恵器、灰陶器が出土しており、器形には壺、甕類が多い。

第2号住居址（第11図）

第1号住居址に西半分を切られ、南半分は削平されてしまつており、北東部分の四半分がわずかに検出できたにすぎない。北側および東側の壁面を見る限りは、東西に長い長方形のプランを呈するものと思われる。床面は地山土を14cmほど掘り下げ築かれている。住居址内の施設は、床面の東北隅と中央付近の2ヶ所に径30cmの丸い扁平な石が置かれていた以外は、全く検出すること



第11図 第2号・第3号住居址実測図

ができなかった。

遺物は土師器、須恵器が床面上に僅か散乱しているにすぎなかった。

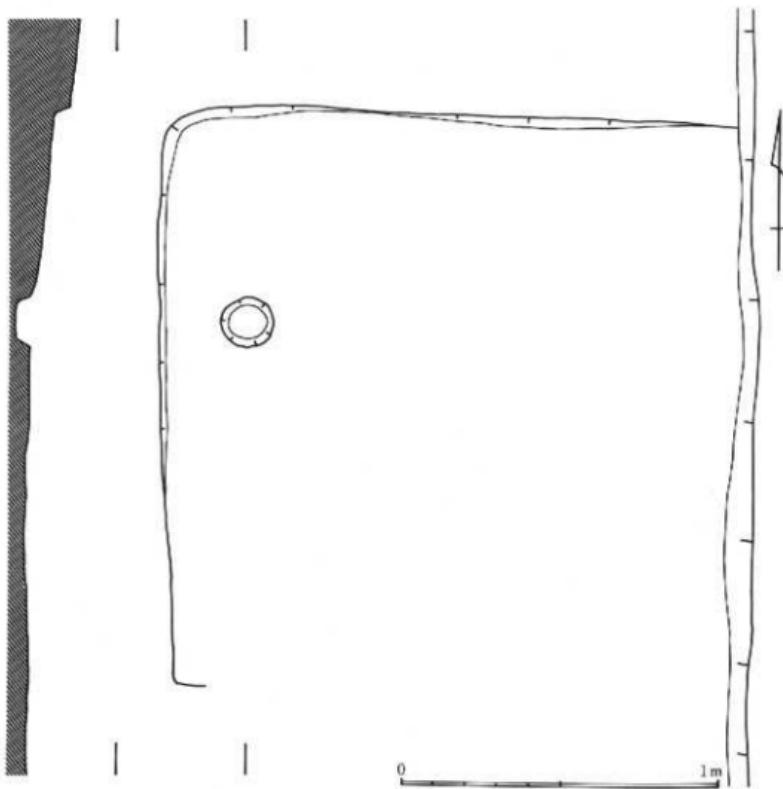
第3号住居址（第11図）

第2号住居址の南隣に検出された。西北隅を第1号住居址によって切られている外、北半分は削平され失われている。第2号住居址とも重なるものと思われるが、第2号住居址の南半分が消失してしまっているため、第3号住居址と第2号住居址との関係は不明である。

住居址の規模は東西3.9mを測る。主軸方向をほぼ北側にもつ。床面は北側で地山を20cmほど掘り込んで築かれており、北側及び東西の壁は直線的に掘られている。カマド、柱穴等の住居址内の施設は検出されていない。床面上からは若干の土師器、須恵器片が出土した。

第4号住居址（第12図）

第3号住居址の南側にある。東側の部分は調査ができなかった。

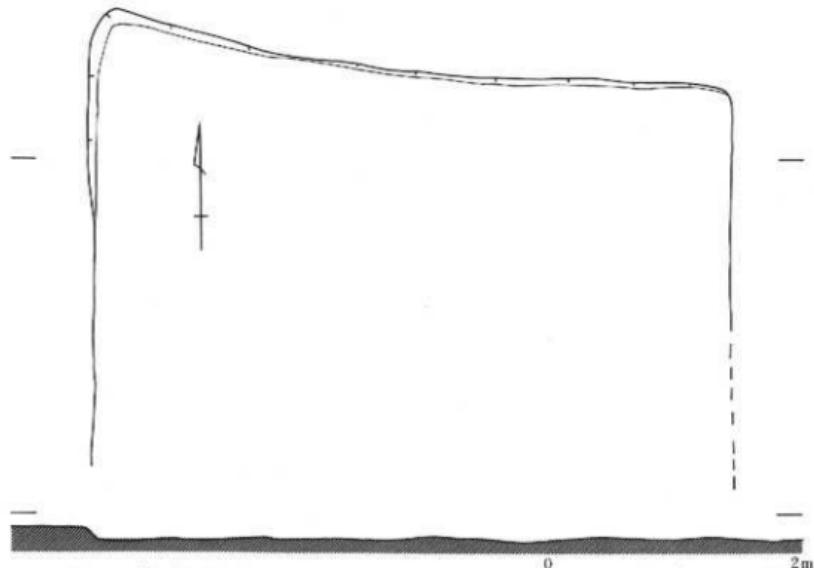


第12図 第4号住居址実測図

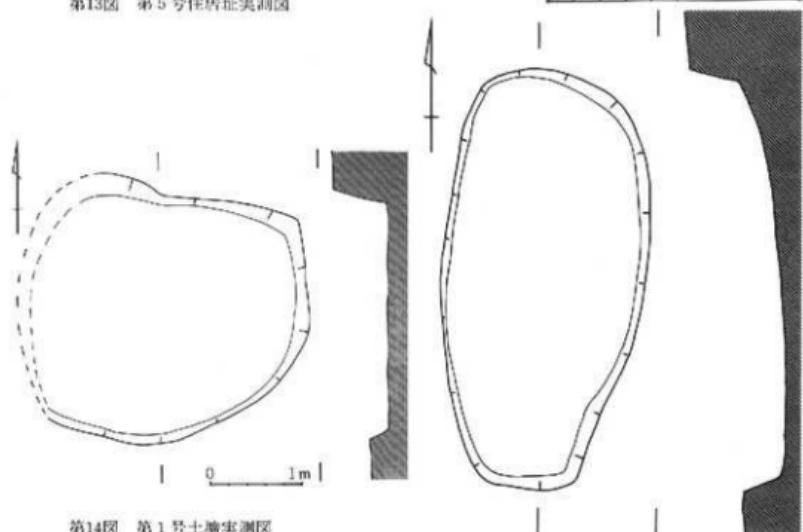
南北3.7mを測る方形の住居址であるが、南壁は削平され損なわれている。北壁では地山を10cmほど掘り下げて床面を染いでいる。床面はほぼ平坦である。住居址内の施設は北西隅に径35cm、深さ10cmの柱穴と思われる円形のピットが築かれている以外は何ら検出することはできなかった。床面上からは若干の土師器、須恵器片が出土している。

第5号住居址（第13図）

第1号住居址の南側、第4号住居址の西側にある。南側四分が削平されてしまっている。東西5mを測る方形の住居址であるが、西北隅はいくぶん北側へ張り出している。北壁の部分では地山を8cmほど掘り下げて床としている。床面はほぼ平坦であるが、検出された面は住居址の掘り方の部分であって、本来の床面は検出面より上位にあって、既に削平されてしまっている。

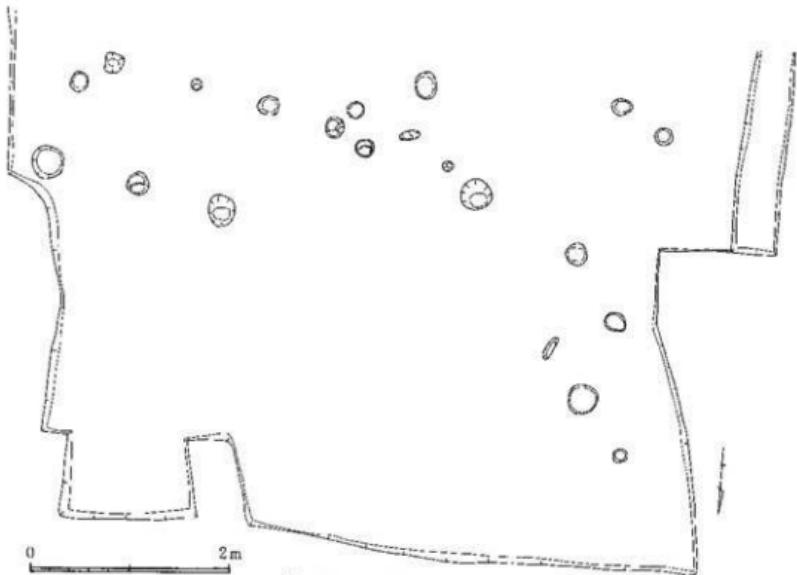


第13図 第5号住居址実測図



第14図 第1号土壤実測図

第15図 第2号土壤実測図



第16図 柱穴様遺構群実測図

ものと思われる。このためか、住居址に付属する施設は何も検出することができなかった。

土壙

調査区の西側に2基の土壙が検出された。

第1号土壙（第14図）

第1号住居址の西側7mの地点で検出された。西隅は試掘溝により削りとられてしまっていたが、試掘時の調査を加えて復元すると、径2.7mほどの円形のプランを持つ。深さは地山面から、南側で20cm、北側で60cmほど掘り込んでいる。底はほぼ平坦である。覆土には大小の礫がつまつており、礫の間に土師器・須恵器片がまじっていた。

第2号土壙（第15図）

第1号土壙の南側4.5mほどの位置で検出された。長径3.2m、短径1.5m、地山面からの深さ40cmを測る南北に長軸をもつ楕円形のプランをもつ。底は平坦であるが、南側のほうが北側に比べて30cmほど低い。覆土は黒色土一層である。遺物はほとんど出土していない。

柱穴様遺構（第16図）

調査区北側一帯から21ヶ所のピットが検出されている。径50cmのものから径15cmのものまで大きさは一定していない。畠地造成のため地山面まで削りとられているため、いずれも浅い。

これらには一定の規格もなく、何らかの建物跡と判断するのはむずかしい。

第2節 出土した遺物

今回発掘した地点は、小扇状地の中央部にあり南斜面となっている。そのため、遺構は畑地造成のためかなり削られており、遺物についてはかなりの量が移動しているとみてよいと考える。出土した遺物の分布範囲をみてもグリッドナンバーのA・Bラインに多い。したがって、遺構出土の遺物は、図示できるもののみとし、またグリッド出土の遺物についても同様にした。

(1) 遺構出土の遺物

1 第1号住居址

第16図1から15までが第1号住居址より出土した遺物である。大別すると、土師器・須恵器・灰釉陶器に分類できる。土師器には、壺(5・6・7・8・12)と甕(9・10・11)がある。7と8は内面が黒色処理されている。6の底部周辺はヘラ削りが施されている。甕はいずれも口縁部が「く」の字状に外反する形態をしている。須恵器には、壺(13・14)と蓋(15)と長頸壺(1・2・3)がある。他に図示されてないが四耳壺や大甕も出土している。1・2・3の長頸瓶は、その特徴及び出土状態からして同一個体と思われる。灰釉陶器として4の碗が出土している。(当該住居址において出土した土器は、量的にも器種としても他の遺構を上回っている。その原因是、口頭に述べたごとくの遺跡の状態と第2号住居址と切り合っていることによると考えられる。)

2 第1号土壙

第16図16から26までは第1号土壙より出土したものである。16・17・18・19・20・21・22・23は土師器の壺である。22以外は内面が黒色処理されている。19は、外面に赤色塗彩の痕跡がみられる。21についても内面に同様の痕跡が認められる。26は土師器の皿である。内面が黒色処理されたもので、高台が付くと思われる。25は土師器の甕であるが、頸部のくびれは弱く、口縁部はゆるやかに外反する。24は、長頸瓶であるが、底部のみで全体の器形を知り得ない。

3 第5号住居址

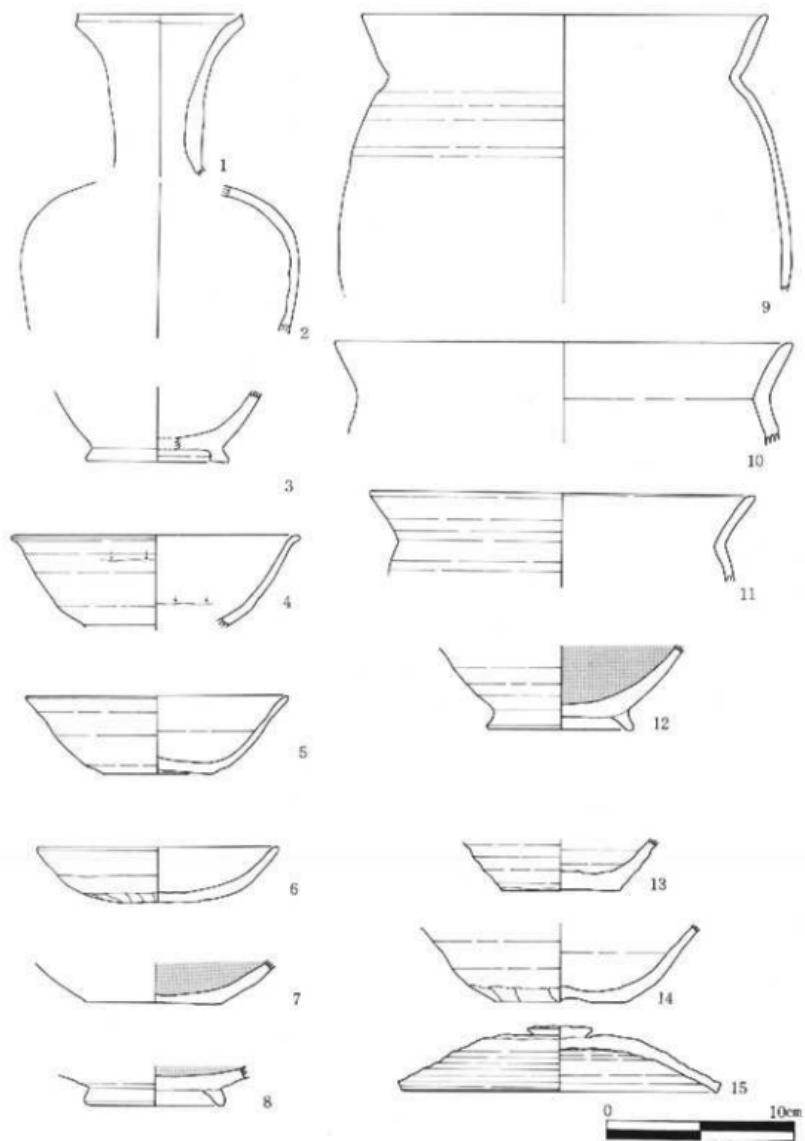
第5号住居址で図示できたのは、18図27の土師器の壺のみであった。内面が黒色処理されており、底部は回転ヘラ削りによる調整を行なっている。

(2) グリッド出土の遺物

当調査地域においては、畑地造成により旧表土・覆土が移動されている。したがって、南部のグリッドにおいて遺物の出土量が著しい。そのため図示されている遺物も南部のグリッドのものが中心となっている。

① A・3 グリッド (第18図28・29)

28は内面が黒色処理された土師器の壺である。29は、土師器の甕である。口縁部が垂直に立ち



第17図 出土土器実測図(SB-01, 1~15)

上がり口唇部が外反している。

②A-4 グリッド（第19図30～46）

30・31・32・33は土師器の坏である。30以外は内面が黒色処理されている。いずれも大形であり、31などは大皿と呼んだ方がいいのかもしれない。41は土師器の皿である。内面は黒色処理されている。特筆すべきは、外面に線刻の文字が刻まれていることである。2文字のうち1つは、「西」と読めるが、他方は判読不明である。34・35・36・37・38・39は須恵器の坏である。39は底部に回転ヘラ削りが施されている高台付の坏である。他のものは、糸切りが施されている。45は、須恵器の脚部のみであるため器種が判然としない。42・43・44は須恵器の蓋である。いずれも大片部にふくらみをもつ。44はつまみ部の有無が不明である。46は、長頸壺である。胴部のみであり全体の器形は知り得ない。

③A-5 グリッド（第20図47～53）

47は土師器の坏である。内面は黒色処理されている。48・49は須恵器の坏である。48は底部に糸切痕が認められるが、49は回転ヘラ削りが施されている。50・51・52はいずれも蓋であるが、50・51は、内面が黒色処理された土師器の蓋である。52は須恵器の蓋である。ともに天井部が扁平で平らに近いものである。53は、灰釉陶器の碗である。底部が欠損しているが、おそらく高台が付くものと思われる。

④A-6 グリッド（第23図108～120）

108は土師器の坏である。内面が黒色処理されている。119は土師器の裏である。口縁部がゆるやかに外反する。109・110は須恵器の坏である。111は須恵器の鉢である。整形は丁寧であり、底部に付高台をもつ。112・114・115・116・117・118は須恵器の蓋である。113・112は天井部が扁平で平らに近いものである。その他のものは、天井部にふくらみをもつ。126は長頸壺であるが、上半部分が欠如しており全体の器形を知ることができない。

⑤A-7 グリッド（第23図121・122・123）

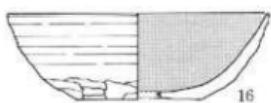
121は土師器の鉢と思われるが、口縁部が欠損しており器種は不明である。内面は黒色処理されている。122は須恵器の坏である。底部のみであり全体の器形を知り得ない。底部には回転ヘラ削りが施されている。123は、須恵器であるが、高台の付く底部のみであり器種を知ることはできない。

⑥B-2 グリッド（第20図54）

54は土師器の坏である。内面が黒色処理されている。

⑦B-3 グリッド（第20図55～61）

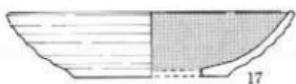
55・56は土師器の坏である。いずれも内面が黒色処理されている。59・60・61は土師器の裏である。59・60は同一の個体と思われる。口縁部はゆるやかに外反する。底部はヘラ削りされている。61は、口縁部のくびれは弱いが、口縁部に至って外反している。57・58は須恵器の坏である。58は口縁部がわずかに外反する。



16



22



17



23



18



24



19



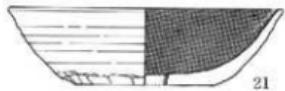
25



20



26



21



28



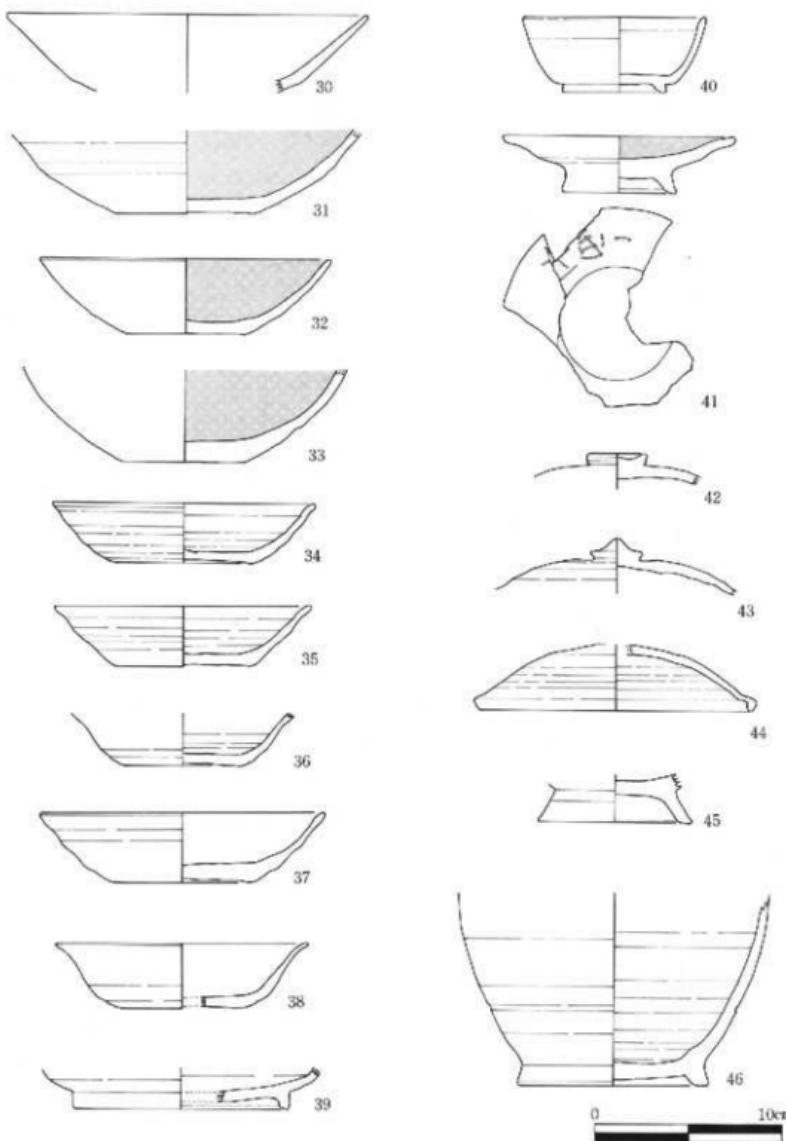
27



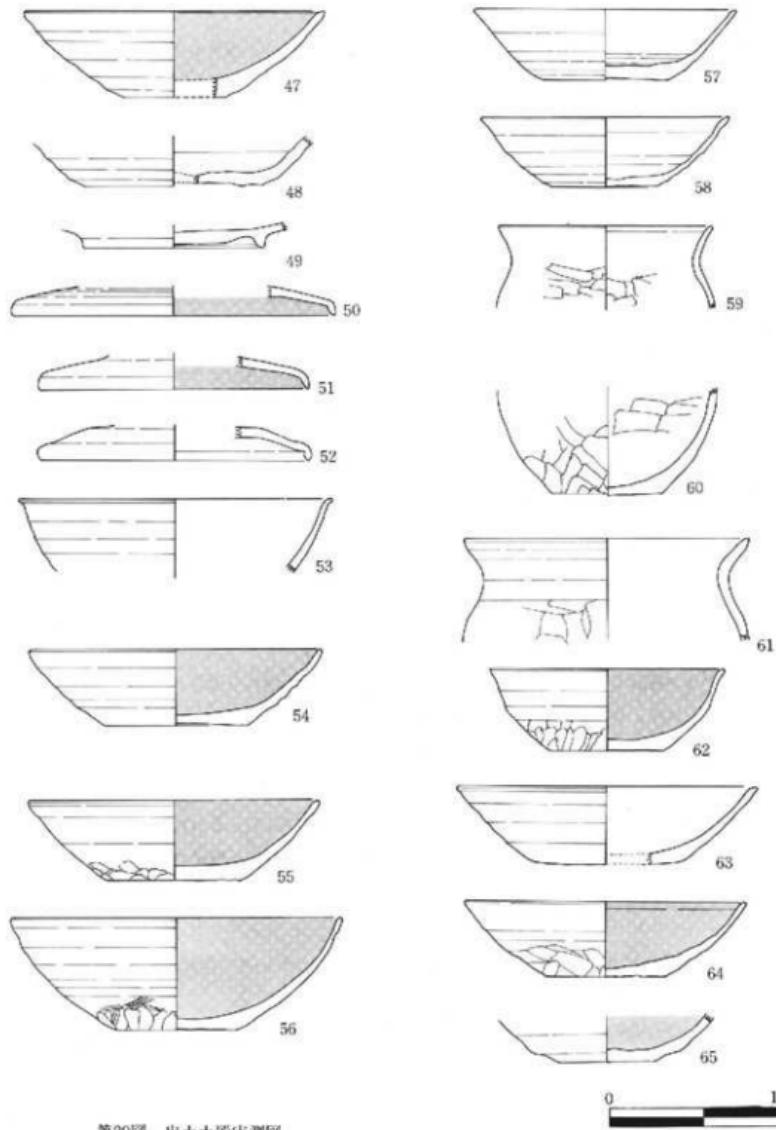
29



第18図 出土土器実測図(SK-01, 16~26・SB-05, 27・A-3 グリッド, 28, 29)



第19図 出土土器実測図(A-4グリッド、30-46)



第20図 出土土器実測図
(A-5グリッド, 47~53・B-2グリッド, 54・B-3グリッド, 55~61
・B-4グリッド, 62~65)

⑧B-4 グリッド (第20図62~65・第21図66~79)

62・63・64・65・66は土師器の坏である。64・65・66は内面が黒色処理されている。67は、大皿である。底部は回転ヘラ削りが施されている。また、高台が付いたと思われる。68・69・70・71・72・73は須恵器の坏である。72・73は底部に回転ヘラケズリが施されている。他は、回転系切りが施されている。74・75・76・77は須恵器の蓋である。いずれも天井部にふくらみをもつものと思われる。74は小型の蓋と思われる。78は土師器の甕である。口縁部は「く」の字に外反する。79は長颈壺の底部と思われる。

⑨B-5 グリッド (第21図80~86・第22図87)

80・81・82・83は土師器の坏である。83はいわゆる黒色上器と呼ばれる内外面ともに黒色の土器である。その他は、内面のみが黒色処理されたものである。85は土師器の蓋である。天井部は扁平で平らに近いものである。内面は黒色処理されている。86・87は長颈甕である。86は頸部であり、87は底部であり高台が付くものと思われる。同一個体であるかは判然としない。

⑩B-6 グリッド (第22図88~105・第23図106・107)

88・89・90は土師器の坏である。88は内面のみが黒色処理されている。89・90は内外面ともに黒色処理されている。89は口唇部が外反しており、90は足高高台の坏である。91は大皿である。内面は黒色処理されている。高台が付くかは不明である。106は土師器の甕である。口縁部は「く」の字に外反している。胴部はおそらく球形に近くなると思われる。72~100は須恵器の坏である。100を除きいずれも底部に系切りが施されている。101・102・103・104・105は須恵器の蓋である。101を除き、いずれも天井部にふくらみをもつ。104はつまみが付くかは判然としない。107は須恵器の坏の胴部下半の破片であるが、その外面に「大」と読める墨書が施されている。

⑪B-7 グリッド (第23図124)

124は須恵器の短颈壺である。全体の器形は知り得ない。

⑫D-4 グリッド (第24図125・126・127)

125は土師器の坏である。内面は黒色処理されている。126は皿と思われる。須恵質の焼成であり、内外面ともに黒色処理されている。127は土師器の甕である。口縁部は直線的に立ち上がり、わずかに外反している。

⑬D-5 グリッド (第24図128)

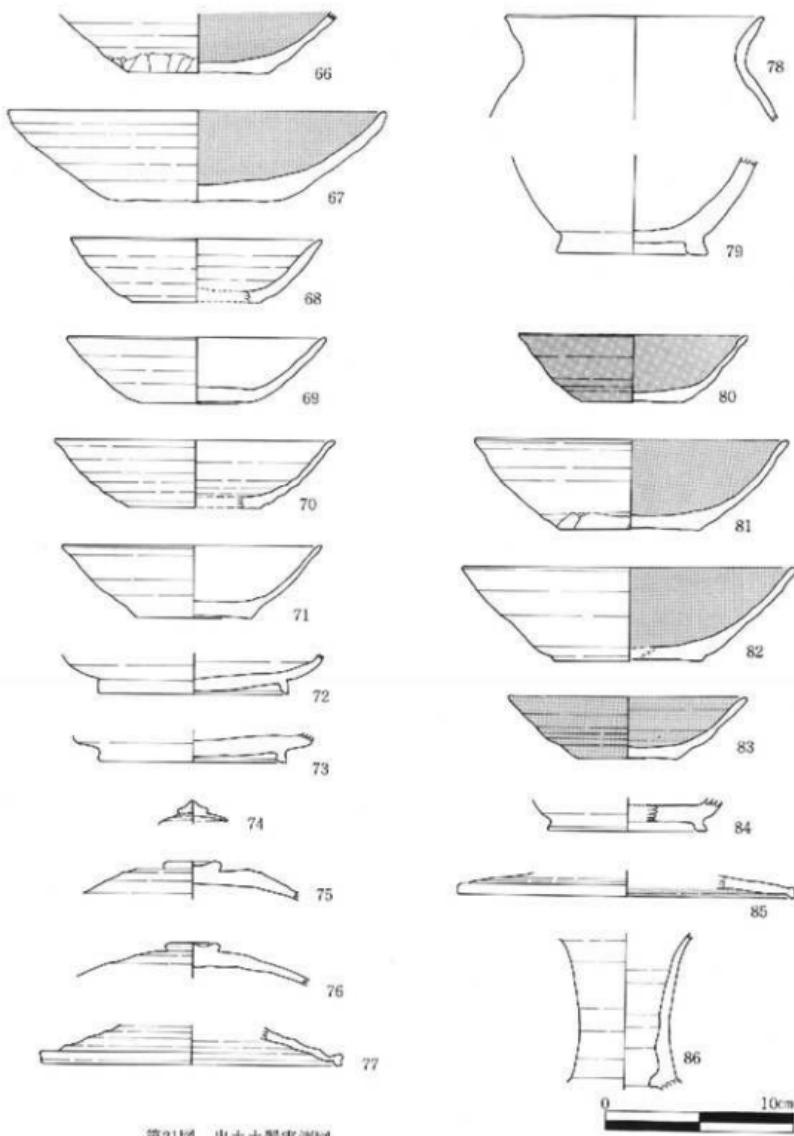
128は土師器の坏である。内面は黒色処理されている。比較的高い付高台が付いている。

⑭E-2 グリッド (第24図129)

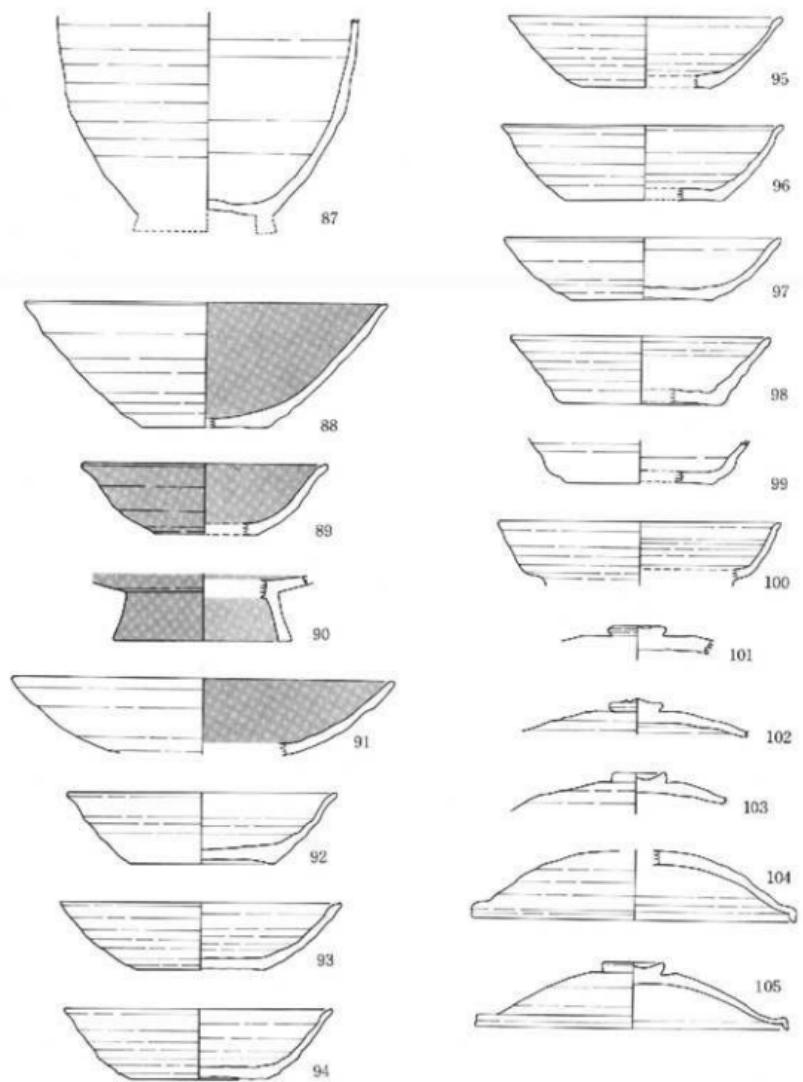
129は土師器の甕である。口縁部のみで全体の器形は知り得ない。口縁はわずかに外反している。

⑮F-7 グリッド (第24図130・131・132)

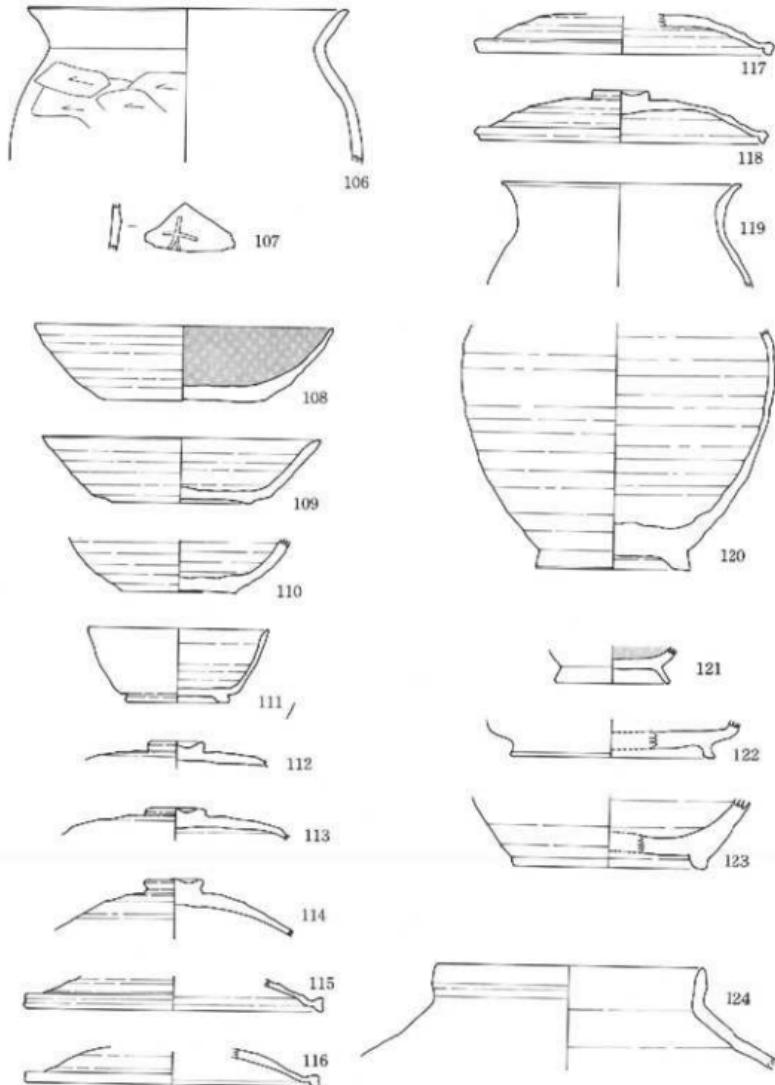
130・131は土師器の坏である。内面は黒色処理されている。132は土師器の皿である。内面は黒色処理されており、底部には高台が付くものと思われる。



第21図 出土土器実測図
(B-4グリッド, 66~79・B-5グリッド, 80~86)



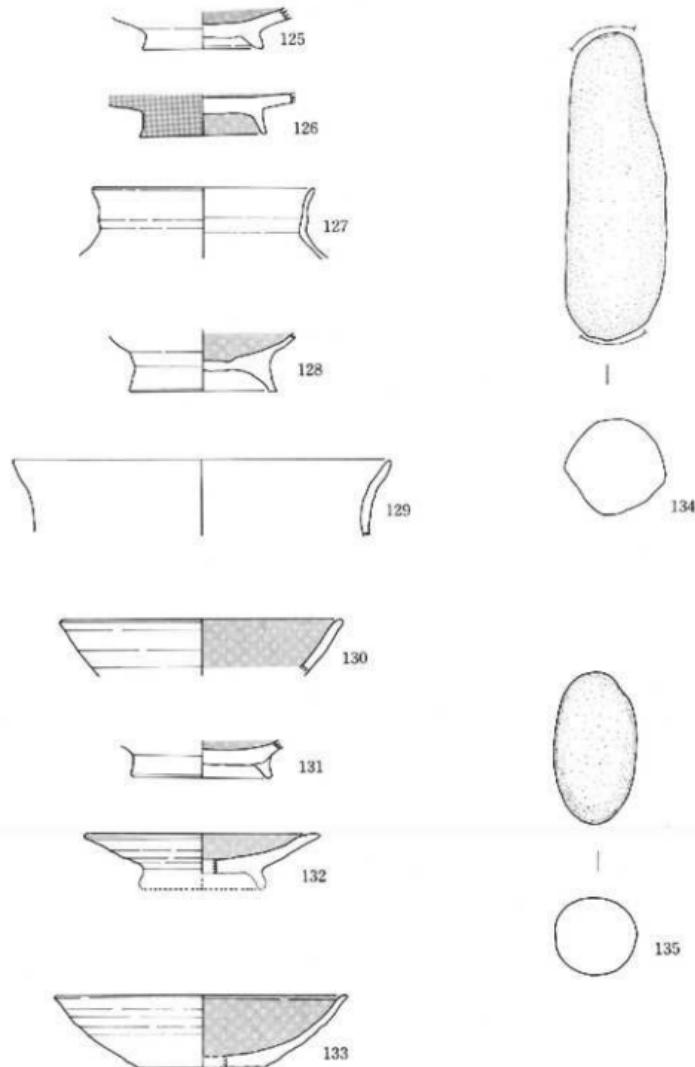
第22図 出土土器実測図
(B-5グリッド, 87・B-6グリッド, 88-105)



第23図 出土土器実測図

(B-6グリット, 106・107・A-6グリット, 108~120
A-7グリット, 121~123・B-7グリット, 124)





第24図 出土土器及び石器実測図
 (D-4グリッド, 125~127・D-5グリッド, 128
 E-2グリッド, 129・F-7グリッド, 130~132
 造構外, 133・A-6グリッド, 134・SK-01, 135)

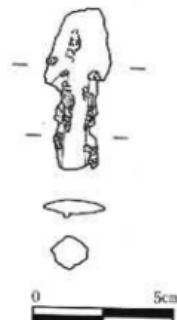
⑩その他（第24図133・134・135）

133は、土師器の环であるが、出土状況が不明である。内面は黒色処理されている。134・135は敲石と思われる。134は、A-6グリッドより出土している。135は第1号住居址より出土している。第25図は鉄鍊である。先端部が欠損しているが、形状を知ることができる。出土状況は不明だが、第1号土壤付近より出土している。第26図は銅製の「和同開珎」である。いうまでもなく、この銅銭は奈良時代に铸造された日本最初の貨銭である。まん中に方形の孔をもつ。B-2グリッドより出土している。その他、図示はしていないが羽口及び鉄津・鉄製品も出土している。羽口はA-5グリッドより出土している。鉄津は第1号土壤より出土している。また、鉄製品は、B-4グリッドより出土している。最近のものと思われる。

本遺跡では、先述したようにグリッドナンバーのA・Bのラインを中心に土器が集中している。これらは、土の移動から考えて北側の遺構の遺物であったと思われる。具体的に述べるならば、第1・2・3・4・5号住居址のものと考えられる。土器の量的分布状況もこのことを示唆している。

総じて、この遺跡の土器はその形態・調整より、9・10世紀の特徴を示していると考えができる。

（なお、写真図版の第20・21図版には、図示されていない須恵器の大甕を載せておいた。参考照されたい。）



第25図 鉄鍊



第26図 和同開珎

出上上 器計測一覽表

S B - 01

造物 番号	法 律 規 制 規 定 (cm)	形態上の特徴		手法 I. の特徴		手法 II. の特徴		土塊或 者		調 査 方 法	
		11種 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量
1	長筒型		付筒口		ロクロ成形			良	灰	灰	1~3箇一側面
2	"				ロクロ成形						
3	"	16.0			ロクロ成形						
4	96				ロクロ成形						
5	15	13.8	5.7	4.2	ロクロ成形、圓柱ヘラ削り						
6	"	12.6	4.0	2.9	直筒ヘラ削り、手モチヘラ削り						
7	"	7.2			ロクロ成形、ヘラミガキ、内黒						
8	"	7.0			ロクロ成形、ヘラ削り						
9	雙	21.5			ロクロ成形、ハケナダ(削下端)						
10	环	24.1	"	"	ロクロ成形、ハケナダ						
11	雙	20.2			ロクロ成形						
12	环	7.5			ロクロ成形、圓柱状器						
13	↑	6.2			直筒型、圓柱状器						
14	环	6.8	"	"	ロクロ成形、ヘラ削り						
15	蓋	16.2	3.2		ロクロ成形、ヘラ削り						
					大件部外面ドーム状						

S K - 01

造物 番号	法 律 規 制 規 定 (cm)	形態上の特徴		手法 I. の特徴		手法 II. の特徴		土塊或 者		調 査 方 法	
		11種 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量	直通 度量
16	16	13.7	6.5	4.6	丸味を持ち立ち上がる						
17	"	14.8	7.8	3.5	"	ロクロ成形、ヘラ削り、内黒					
18	"		7.7	"		ロクロ成形、系切りの後ヘラナデ、内黒					
19	8		7.3		付筒口	ロクロ成形、ヘラ削り、内黒					
20	"		6.4			ロクロ成形、内黒					
21	"	14.3	7.5	4.1	丸味を持ち立ち上がる	ロクロ成形、ヘラ削り					

S B 05

A - 4

A - 5 2711 19 12

47	16	15.6	5.3	4.6	丸味をもって立ち上がる	クロ成形、内湯	赤褐色	黑色	上触型
48	n		9.4			クロ成形、圓輪形切り	黒灰色	黑色	吸塑型、牛油叶
49	n		9.6			クロ成形、向板ヘラ盛り	暗灰色	黑色	吸塑器
50	鑑		17.1		天津麺半分になる	クロ成形、内湯	深灰色	黑色	土鍋器
51	n	14.2			天津麺半分になる	クロ成形、内湯	深灰色	黑色	手鉢器
52	n	14.2			天津麺半分になる	クロ成形	深灰色	黑色	領便器
53	鑑		16.6		丸味をもって立ち上がり 口唇部は外反する	クロ成形	青灰色	黑色	口灰器

B-2412

54		16		15.4		7.4		4.0		やえ丸をもって立ち上がる		口クロ成形、回転が切り、内歯		口		赤褐色		黒		白		赤褐色		黒	
55	η	15.4	6.9	4.3	医師的に立ち上がる	口クロ成形、ヘラミガキ、内歯	口	16.7	口	口	口	赤褐色	黒	色	土蜘蛛										
56	η	17.5	6.1	5.9	丸棒をもって立ち上がる	ロクロ成形、ヘラミガキ、内歯	黒口子	良	口	口	口	口褐色	黒	色	土蜘蛛										
57	n	13.8	6.0	3.8	11頭部点線輪に開く	ロクロ成形、回転が切り	口	良	口	口	口	口褐色	黒	色	土蜘蛛										
58	n	12.9	5.4	3.7	やえ丸棒をもって立ち上がる	ロクロ成形、回転が切り	口	不良	口	口	口	口褐色	黒	色	土蜘蛛										
59	η	11.2			山根端外反する	ヘラミガキ(削説)	口泡子	良	口	口	口	口褐色	黒	色	土蜘蛛										
60	熟					ヘラミガキ(削説)	口泡子	良	口	口	口	口褐色	黒	色	土蜘蛛										
61	熟					ヘラミガキ(削説)	口泡子	良	口	口	口	赤褐色	赤	色	土蜘蛛										

B-4 グリッド

番号	部位	器種	法 量 (cm)		形態上の特徴			手法上の特徴			施土量	施土方法	色調		備考	
			口径	底径	高さ	底面	内面	外	内	面			赤褐色	黑色	土蜘蛛	+
62	15		12.3	5.8	4.4	丸味をもつて立ち上がり、内側部外反する	ロクロ成形、ヘラ引き、内側部外反する	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
63	n		13.7	7.7	4.2	直線的に立ち上がる	ロクロ成形、側面斜め切り、ヘラ削り	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
64	n		14.7	6.4	4.0	丸味をもつて立ち上がる	ロクロ成形、側面斜め切り、内側部外反する	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
65	n		13.0	5.0		丸味をもつて立ち上がる	ロクロ成形、側面斜め切り、内側部外反する	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
66	n		7.3			直線的に立ち上がる	ロクロ成形、側面斜め切り、内側部外反する	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
67	大皿		19.7	7.3	4.9	体側はわずか丸味をもつ	ロクロ成形、内側へラ削り、内側部外反する	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
68	平		13.0	6.7	3.4	直線的に立ち上がる	ロクロ成形、側面斜め切り	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
69	n		13.5	5.6	4.0	直線的に側く	ロクロ成形、側面斜め切り	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
70	n		14.6	7.0	3.7	直線的に立ち上がる	ロクロ成形、側面斜め切り	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
71	n		13.4	6.0	3.9	丸味をもつて立ち上がる	ロクロ成形、側面斜め切り	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
72	n		10.0			付着台	ロクロ成形、側面斜め切り	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
73	n		9.8			付着台	ロクロ成形、側面へラ削り	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
74	皿					天井部ドーム状	ロクロ成形	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
75	n					天井部ドーム状	ロクロ成形	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
76	n					天井部ドーム状	ロクロ成形	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
77	n		15.8			天井部くの字に開く	ロクロ成形、ヘラ削り	良好	良好	灰色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
78	皿		13.4		7.9	付着台	ロクロ成形、側面斜め切り	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
79	n															

B-5 グリッド

番号	部位	器種	法 量 (cm)		形態上の特徴			手法上の特徴			施土量	施土方法	色調		備考	
			口径	底径	高さ	底面	内面	外	内	面			白色	黑色	土蜘蛛	+
80	15		12.0	5.3	3.6	丸味をもつて立ち上がり、内側部外反する	ロクロ成形、圓板斜め切り、黒色十器	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
81	n		16.4	7.3	4.8	丸味をもつて立ち上がり、内側部外反する	ロクロ成形、ヘラ削り、内側部外反する	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
82	n		17.5	7.6	5.0	直線的に立ち上がる	ロクロ成形、圓板斜め切り、内側部外反する	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+
83	n		12.5	5.1	3.3	直線的に立ち上がる	ロクロ成形、側面斜め切り、黑色上器	良好	良好	黑色	+砂	+砂	土蜘蛛	+	土蜘蛛	+

植物 番号	密性 口徑	法 量(cm)	形態上 の特徴	手法上 の特徴
84	序	8.4	竹筒石	ロクロ成形、ヘラ削り
85	臺	17.7	天井部は平らになる	ロクロ成形
86	瓦	7.0	什扁台(穴)	ロクロ成形
87	n			ロクロ成形

B-6 クリップ

植物 番号	密性 口徑	法 量(cm)	形態上 の特徴	手法上 の特徴	色		調 理		保 持	
					外 面	内 面	底 板	底 板	底 板	底 板
88	16	19.2	6.6 直線的に聞く	ロクロ成形、刮板系切り、内面 丸味をもって立ち上がり、上端部外反する	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
89	n	12.7	5.4 竹筒石(瓦高)	ロクロ成形、黑色上器 おずかに丸味をもつ	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
90	n	9.3	竹筒石	ロクロ成形、ヘラ削り、内凹	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
91	大皿	20.0		ロクロ成形、刮板系切り	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
92	16	14.4	7.4 直線的に立ち上がり、U字縫わざかに外反する	ロクロ成形、刮板系切り	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
93	n	16.8	6.8 丸味をもつて立ち上がる	ロクロ成形、刮板系切り	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
94	n	14.0	7.7 直線的に立ち上がる	ロクロ成形、刮板系切り	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
95	n	14.2	7.0 丸味をもつて立ち上がる	ロクロ成形、刮板系切り	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
96	n	14.4	7.8 直線的に立ち上がる	ロクロ成形、刮板系切り	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
97	n	14.4	7.5 丸味をもつて立ち上がる	ロクロ成形、刮板系切り	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
98	n	13.5	8.3 直線的に立ち上がる	ロクロ成形、刮板系切り	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
99	n	7.6		ロクロ成形、刮板系切り	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
100	n	7.4		ロクロ成形	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
川	西			ロクロ成形	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
加	n			ロクロ成形、頭毛ヘラ削り	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
101	n	17.0	天井部D-LM状	ロクロ成形、頭毛ヘラ削り	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
102	n	16.5	天井部D-LM状	ロクロ成形	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
103	n	17.0	天井部D-LM状	ヘラ削り(体感)	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利
104	n			ロクロ成形	黒 色	黒 色	砂 利	砂 利	砂 利	砂 利

A-6 グリッソ

植物 番号	器種	法 量(cm)		形態上の特徴		手法上の特徴		動・土用		色・潤		備考		
		直通	筋通	筋端	筋端	内葉	外葉	内葉	外葉	好	好	黒	黒	上脚筋
108	16	15.7	7.2	4.0	体筋丸頭を立ち上かる	ロクロ成形、内葉		小粒子	不良	黄褐色	黑色	黑色	黑色	大アスキ
109	17	14.5	7.3	3.5	筋筋的に立ち上かる	ロクロ成形、回転糸切り		白粒子	良	黄褐色	黑色	黑色	黑色	深部筋、大アスキ
110	18	6.0			大株をもって立ち上かる	ロクロ成形、糸筋糸切り				茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	深部筋
111	19	9.5	5.3	4.0	筋高付、間隔的に立ち上かる	ロクロ成形、糸筋糸切り				暗灰色	暗灰色	暗灰色	暗灰色	側也筋
112	20				大井筋平らに	ロクロ成形				青灰色	青灰色	青灰色	青灰色	側也筋、外葉に附れ
113	21				大井筋ドーム状	ロクロ成形、回転ヘラ削り				青灰色	青灰色	青灰色	青灰色	側也筋
114	22				大井筋ドーム状	ロクロ成形				玉灰色	玉灰色	玉灰色	玉灰色	側也筋
115	23				大井筋ドーム状	ロクロ成形				灰	灰	灰	灰	側也筋
116	24				大井筋ドーム状	ロクロ成形				灰	灰	灰	灰	側也筋
117	25				大井筋ドーム状	ロクロ成形				暗灰色	暗灰色	暗灰色	暗灰色	側也筋
118	26				大井筋ドーム状	ロクロ成形				黑灰色	黑灰色	黑灰色	黑灰色	側也筋
119	27				口筋筋外反する	ロクロ成形、ヘラ削り				黑色	黑色	黑色	黑色	側也筋
120	28				ロクロ成形	ロクロ成形				青灰色	青灰色	青灰色	青灰色	側也筋

A-7 グリッソ

植物 番号	器種	付高台		付高台		付高台		母		母		母		母	
		直通	筋通	直通	筋通	直通	筋通	直通	筋通	直通	筋通	直通	筋通	直通	筋通
121	29	6.0		付高台		付高台		ロクロ成形、回転糸切り、内葉		ロクロ成形、回転糸切り、内葉		ロクロ成形、回転糸切り、内葉		ロクロ成形、回転糸切り、内葉	
122	30	10.6						ロクロ成形、回転糸切り		ロクロ成形、回転糸切り		ロクロ成形、回転糸切り		ロクロ成形、回転糸切り	
123	31	10.2						ロクロ成形、ヘラ削り		ロクロ成形、ヘラ削り		ロクロ成形、ヘラ削り		ロクロ成形、ヘラ削り	
124	32	13.8		口筋筋垂直に立ち上かる				ロクロ成形		ロクロ成形		ロクロ成形		ロクロ成形	
125	33	6.4		付治台											

D-4 グリッソ

遺物番号	法長(cm)	法幅(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	土台	外表面	内面	色調	備考
125 Ⅲ	11.0	6.6	付高台 山形形態面に立ち上がる	ロクロ成形、黑色上絵	良	黒	黑色	土師器	
127 Ⅲ	11.6			ロクロ成形	良	良	赤褐色	土師器	

D-5 グリット

128 环	7.8	付高台	ロクロ成形、内黒	砂	良	黄褐色	黑色	土師器
E-2 グリット								
129 横	19.8	口縁透かし受け口	ロクロ成形	砂	良	褐色	褐色	土師器

E-7 グリット

130 26	14.7		ロクロ成形、内黒	良好	灰	灰色	土師器	
131 〃	7.0	付高台	ロクロ成形、内黒				土師器	
132 Ⅲ	11.9	2.1 裏面に立ち上がる	ロクロ成形、圓輪形切り。内黒				土師器	

第3節 まとめ

殿田遺跡は、平安時代から中世にかけての集落跡と考えられていたが、今回の発掘調査で奈良時代から平安時代にかけての比較的限定された時代の遺跡であったことが判明した。

遺跡は後世の畠地造成のためかつての地形を変えており、かろうじて削平からまぬがれた竪穴住居跡5軒、土壙2軒などを検出することができた。

住居跡は、地山面深く掘り込んで床面が築かれている第1号住居跡を除くと、他は壁と床面の一部分を検出できたにすぎないが、いずれも東西に長い長方形の竪穴住居である。第1号住居址を除くとカマドを持たないが、これはもともとカマドが無かったのか、それとも削平されてしまっていたのかは今回の調査では判断できなかった。第1号住居跡は床面上から出土した上器により平安時代前半のものといえる。上田盆地の平安時代の住居は、竪穴住居で、住居内にカマドを持つが、柱穴は発見されることが多い、本遺跡の住居址も柱穴が発見されていない。4号住居址の北西隅に柱穴用のビットがあるが、これも柱穴であるのかどうか断定はできない。むしろ第2号住居跡にみられるような、扁平な石を礎石として用いていたものと思われる。

調査区の西側から土壙が2基検出された。覆土中からの遺物によって、平安時代のものと判定された。第1号土壙は円形で、中に大小の礎がつめられていた。また、第2号土壙の覆土には黒色土が入っていた。これらのことから、この両者の土壙の性格が異っているものと思える。

調査区の北側に柱穴様のビット群が検出された。この地点は最も削平が激しいところで、以前には検出された以上に何らかの遺構が存在していたものであろうが、たまたま、地山深く掘られた柱穴様のビットが残されたものようである。このビットの配置をみても、規格性のある建造物を想定することはむずかしく、このビット群の北側が急傾斜となって山腹につづいているため、集落の柵あるいは堀地の跡とも考えられるものの推定に止めておきたい。

出土遺物は奈良時代から平安時代の後半期まで幅広く出土しているが、中心となるのは平安時代前半の遺物である。ただ、遺構中から出土したものは極めて少なく、多くが遺構外の、しかも畠地造成時に移動された土層の中から出土している。このため上器個々の分類は行なえたが、それを遺構と結びつけることはできなかった。

分布調査では、殿田遺跡はかなり広範囲にわたる遺跡と把握していたが、発掘調査ではそれほど広い面積を持つ遺跡ではないことがわかった。しかし、今回の調査区が山寄りの地点であり、その南側に平坦な地形がつづいていることを考えれば、今回発掘調査を行った地点は当時の集落の北限に当ると考えたほうが良いであろう。

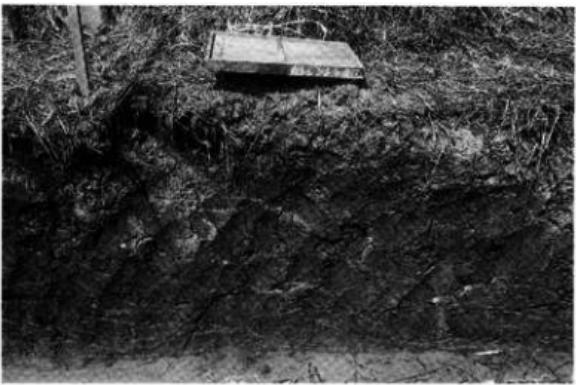
図版一 染屋台条里水田跡遺跡(一)



遺跡全景(南より)



Aトレンチ第1区



Aトレンチ第2区

圖版二 染屋台条里水田跡遺跡(二)

各トレンチの状況



B トレンチ第2区



C トレンチ第3区



C トレンチ第4区

図版三 染屋台条里水田跡遺跡(三)

各トレンチの状況



Cトレンチ第5区



Eトレンチ第4区



Aトレンチ・Eトレンチ直交部分



調査風景



調査風景



調査団



遺跡全景(南より)



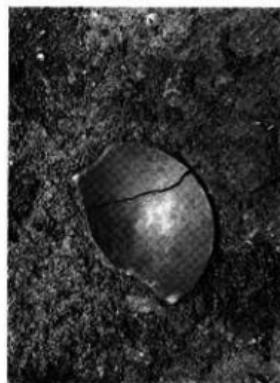
遺跡全景(南東より)



土層断面



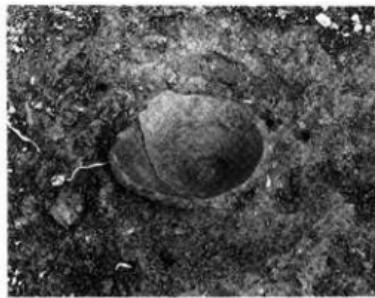
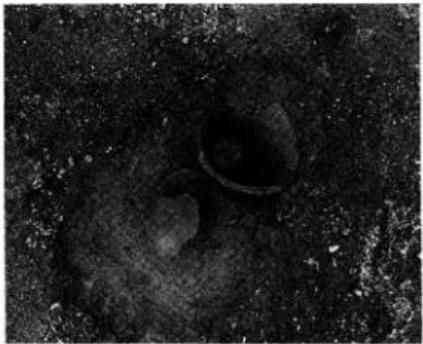
第1号住居址(北より)



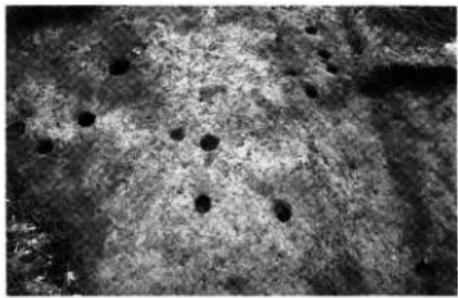
第1号住居址遺物出土状況



第2号住居址(南より)



第2号住居址遺物出土状況



北西グリッドピット群



第1号住居址調査風景



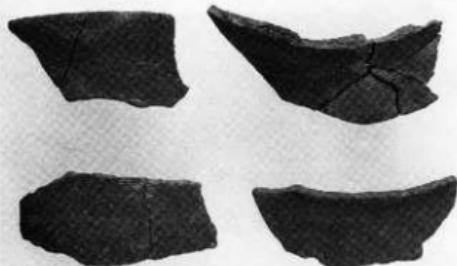
第2号住居址調査風景



調査団



0 5cm



0 5cm



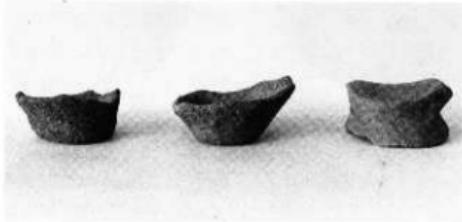
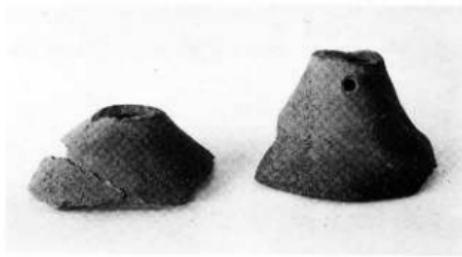
0 5cm



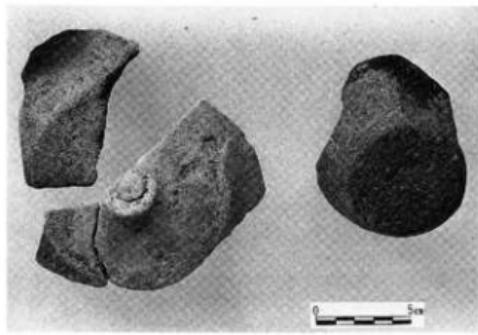
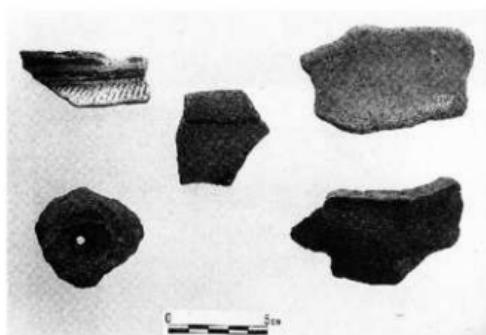
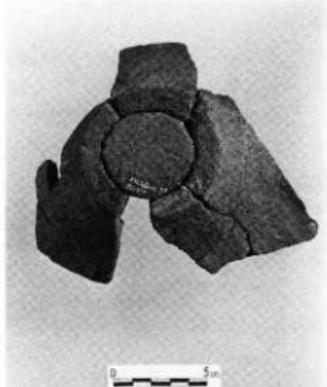
0 5cm

圖版一〇 金井裏遺跡(六)

第一号・二号住居址出土遺物



図版一一 金井裏遺跡(七) グリッド出土遺物





殿田遺跡遺構全景



発掘調査風景

図版一三 殿田遺跡(二) 第一号住居址・同上カマド



第1号住居址



第1号住居址カマド

圖版一四
殿田遺跡
(三)

第一・二・三號住居址・第四・五號住居址



第1号、第2号、第3号住居址



第4号、第5号住居址

図版一五 殿田遺跡(四)
第一号土塁・柱穴様群



第1号土塁



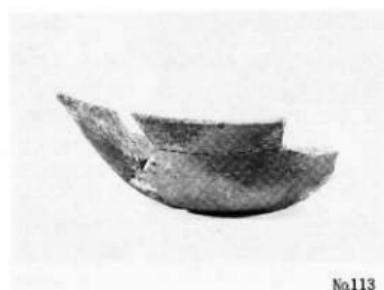
柱穴様群



No.83



No.123



No.113



No.118



No.50



No.95



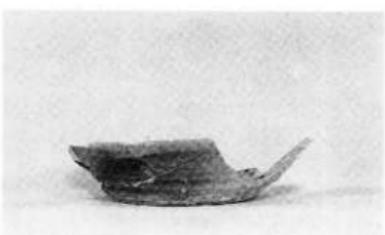
No.133



No.127



No.10



No.105



No.106



No.19



No.112



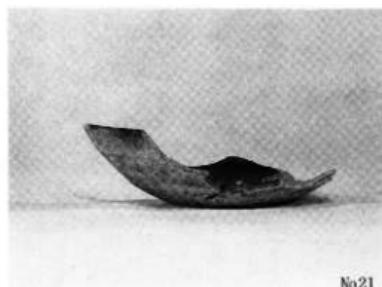
No.77



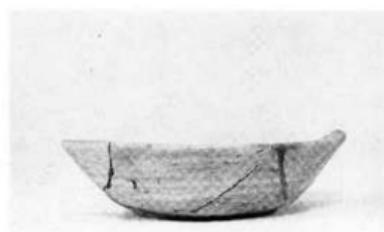
No.112 刻書



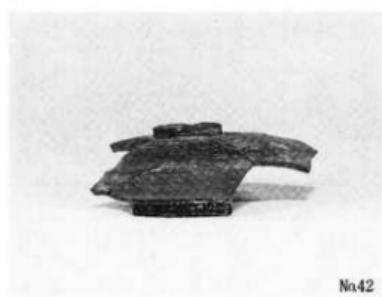
No.1



No.21



No. 6



No.42



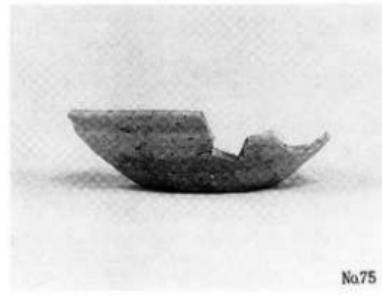
No.126



No.78



No.32



No.75



No.31



No.30



No.12



No.13



No.22



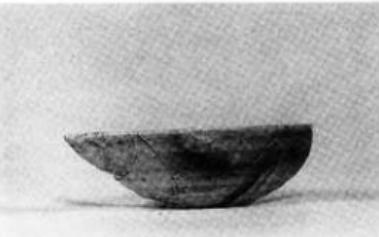
No.33



No. 3



No. 4



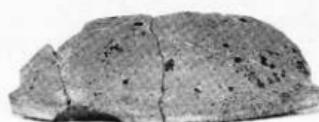
No. 2



No.7



No.41



No.43



No.129



No.29



S B - 01出土土器



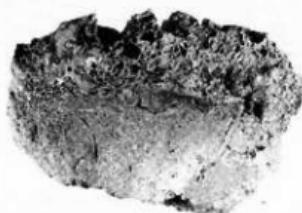
A - 5 グリッド出土土器



A - 5 グリッド出土土器

図版二
一 墓田遺跡

(○)
出土遺物



上田市文化財調査報告書 第27集

**染屋台条里水田跡遺跡
金井裏遺跡
殿田遺跡**

発行 1986年3月31日

上田市教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社
